

# 日本通訳翻訳学会

## 第25回年次大会

スケジュール  
交通アクセスと会場案内  
基調講演  
予稿集

2024年9月7日(土)ー8日(日)  
会場 神戸大学 鶴甲第1キャンパス

# 日本通訳翻訳学会 第25回年次大会スケジュール

開催日:2024年9月7日(土)~8日(日)  
会場:神戸大学 鶴甲第1キャンパス K棟

## 第1日(9月7日)

9:45	K棟入口ホール		
	受付開始		
10:00 -10:50	K202		
	総会		
11:00 -11:10	K202		
	開会式		
11:10 -12:20	K202		
	<b>基調講演</b> 「文化の翻訳」と中東・イスラーム:文化人類学の視点から」(仮題) 齋藤剛(神戸大学大学院国際文化学研究科教授) (司会:藤濤文子)		
12:20 -13:30	<b>昼食・休憩</b>	K303  <b>評議員会</b>	K402  <b>院生コロキウム</b> 院生有志による自主セッション  (司会:サマール・マペーリ)
	K301 <b>A会場</b>	K302 <b>B会場</b>	K402 <b>C会場</b>
13:30 -14:00	A-1 「マルチモーダルなテキストの翻訳研究:日中映像作品の字幕を中心に」 庄妍(神戸大学D) (司会:篠原有子)	B-1 「高等教育における「コミュニティ通訳者育成プログラム」について:京都外国語大学の取り組み」 佐藤晶子(京都外国語大学)、楊蕾(京都外国語大学) (司会:石塚浩之)	C-1 C-2 「通訳者・翻訳者の役割・アイデンティティ・スコピス・力関係・倫理に関する再考:日本人大リーガー専属通訳者問題をきっかけに」 田村智子(国際基督教大学)、板谷初子(北海道武蔵女子大学)、北代美和子(翻訳家)、新崎隆子(NHK グローバルメディアサービス会議・放送通訳者)、鶴田知佳子(東京外国語大学)
14:10 -14:40	A-2 “A journey from the periphery: A multimodal analysis of shōjo manga translations in the 90s” Paula Martínez Sirés (Nihon University) (司会:篠原有子)	B-2 「大学院コミュニティ通訳学コースの取り組み:「顕在的機能」と「潜在的機能」からの考察」 吉田理加(愛知県立大学)、糸魚川美樹(愛知県立大学) (司会:石塚浩之)	
14:50 -15:20	A-3 “Multimodal Analysis of Picturebook Translations: Examining the Visual and the Verbal in The Boy and the Gorilla Across Cultures” Cheng-Ting Chang (The University of Tokyo) (司会:篠原有子)	B-3 「コミュニティ通訳トレーニングアプリの需要と課題:自治体・学生アンケートからの考察」 水野 真木子(金城学院大学)、岡部 純子(大阪国際中学校高等学校 兼 フリーランス) (司会:石塚浩之)	C-3 C-4 「2つの東京オリンピックの間の通訳史」 木村護郎クリストフ(上智大学)、高橋絹子(関西大学)、内藤稔(東京外国語大学)、西畑香里(東京外国語大学)、岩崎修子(関西大学 M)
15:30 -16:00	A-4 「英日ノンフィクション翻訳のパラテキストにみられる翻訳者のエージェンシー」 澤田晶子(関西大学D) (司会:山木戸浩子)	B-4 「助産師外来における質問—応答連鎖における通訳者のストラテジー:段階的訳出の組み立てについての考察」 飯田奈美子(立命館大学) (司会:吉田理加)	

16:10 -16:40	A-5 「翻訳修正に対する姿勢や修正方法への第一(最もスキルが高い)言語の影響」 Heather Glass (University of Melbourne M) (司会:山木戸浩子)	B-5 「医療通訳者の聞き返し方略と会話への影響に関する研究」 森田直美(東京大学)、橋本英樹(東京大学) (司会:吉田理加)	C-5 「原抱一庵のユゴー受容:『レ・ミゼラブル』の翻訳を中心に」 劉丹(神戸大学D) (司会:北代美和子)
16:50 -17:20	A-6 「日中産業翻訳における求められるポストエディット能力:プロ翻訳者へのインタビュー調査より」 単凱(東京工業大学D)、佐藤礼子(東京工業大学) (司会:山木戸浩子)	B-6 「誤訳と誤差の間:日英同時通訳における誤差の概念と許容内容解析」 セランド修子(東京女子大学) (司会:吉田理加)	C-6 「雑誌『翻譯時報』(明治33-34年)とその翻訳言説」 齊藤美野(順天堂大学)、佐藤美希(札幌大学) (司会:北代美和子)
18:00 -20:00	<p style="text-align: center;"><b>懇親会</b></p> <p style="text-align: center;">※懇親会費 5,000円(学生3,000円)</p>		

第2日(9月8日)

	K301 A会場	K302 B会場	K402 C会場
10:00 -10:30	A-7 「ノンバイナリー代名詞の日本語への翻訳—『少女、女、ほか』を例として」 古川弘子(東北学院大学) (司会:齊藤美野)	B-7 「オーセンティックマテリアルを用いた3言語(英語・韓国語・中国語)翻訳指導実践報告:日本人学生と留学生による三原庭園ホームページ共同翻訳の取り組み」 辰己明子(広島大学)、新里喜宣(長崎外国語大学)、呉青青(長崎外国語大学)、金子奈央(元長崎外国語大学) (司会:飯田奈美子)	C-7 C-8 「学会誌の現在・過去・未来:編集サイドと投稿者・読者の対話を育むミニシンポジウム」 『通訳翻訳研究』編集関係者有志の会(長沼美香子(神戸市外国語大学)、藤濤文子(神戸大学)、石塚浩之(広島修道大学)、大久保友博(一橋大学)ほか)
10:40 -11:10	A-8 「重訳(relay translation)——韓国絵本『トッケビのこんぼう』と『さびしがりのトッケビ』を題材に」 尹惠貞(一橋大学) (司会:齊藤美野)	B-8 「翻訳教育の実践から見たベトナム語-日本語翻訳の誤訳:誤訳のパターンと修正提案を中心に」 NGUYEN Thanh Tam(愛知県立大学) (司会:飯田奈美子)	
11:20 -11:50	A-9 「戦後の理科教材翻訳に見られる評価表現:創造的科学的コミュニケーションの可能性」 野原佳代子(東京工業大学) (司会:齊藤美野)	B-9 「継承言語者など多様な背景を持つ受講生を対象とした通訳・翻訳教育の可能性」 朱蔦琳(愛知大学) (司会:飯田奈美子)	C-9 「通訳案内士の通訳に対する意識—「通訳者」のとらえられ方」 岩崎修子(関西大学M)、高橋絹子(関西大学) (司会:石原知英)
11:50 -13:00	<p>昼食・休憩</p> <p><b>K401 ポスター発表</b></p> <p>P-1 「指字通訳および指字通訳者研究へ向けて」 奥野 智萌(東京藝術大学D)</p>		<p>K303</p> <p>理事会</p>

	K301 A会場	K302 B会場	K402 C会場
13:00 -13:30	A-10「日中対訳用語集構築に向けた翻訳の規 準と手続きの明確化:被災者支援分野を対象 に」 朴恵(東京大学)、山浦育子(愛知県立大学 M)、宮田玲(東京大学) (司会:辛島デイヴィッド)	B-10「産学連携による通訳翻訳修士(MTI)の育 成モデルと運用メカニズム」 張晶(北京大学) (司会:長沼美香子)	C-10 C-11「通訳コミュニケーションプロジェクト 報告:通訳研究の可能性」 高橋絹子(関西大学)、石塚浩之(広島修道大学) 飯田奈美子(立命館大学) 大井川朋彦(日本大 学)
13:40 -14:10	A-11「多言語情報発信を支援する自治体横断 型翻訳資源の構築:プロジェクトの理念、枠組 み、現状」 宮田玲(東京大学)、阪本章子(関西大学)、藤田 篤(情報通信研究機構)、香川璃奈(産業技術総 合研究所) (司会:辛島デイヴィッド)	B-11「学習動機に応じた通訳授業の試み」 楊 潔氷(河南理工大学) (司会:長沼美香子)	
14:20 -14:50	A-12「政治文献における“工作”の和訳に関す る研究」 董海濤(北京外国語大学) (司会:辛島デイヴィッド)	B-12「日本における法廷通訳問題未解決の根本 要因を探る:ポストンの法廷通訳人取材に基づく 「力関係」と「専門職化」の分析」 田村智子(国際基督教大学) (司会:長沼美香子)	C-12 C-13「相互行為管理(インタラクション・マ ネージメント):通訳ブースの「保護」なしの個人的 かつ近接的な通訳」 Heather Glass (University of Melbourne M) (司会:大久保友博)
15:00 -15:30		B-13「日本の捜査通訳制度の問題に関するケー スタディ:フィリピン(タガログ)語誤訳事件を事例 として」 道上史絵(立命館大学)、村上智里(関西大学)、吉 田理加(愛知県立大学) (司会:石原知英)	

- 研究発表は、発表 20 分＋質疑応答 10 分です。質問は発表内容に直接関連したことについてののみ、手短に行うものとします。質問者の単なる意見の陳述はご遠慮ください。
  - 各発表間の 10 分間は、出入室のための時間です。移動はすみやかにお願いします。
  - 研究発表・講演の撮影・録画・録音は、発表者・講演者の許可を得ている場合を除き、ご遠慮ください。
  - 発表者の記載にある M および D は、それぞれ発表者が博士前期課程(修士課程)、博士後期課程の学生会員であることを示します。
  - K401はポスター発表会場として使用するほか、休憩室としてもご利用いただけます。お昼時など自由にご利用ください。
  - K401では、出版社による書籍展示・販売も行っています。
- ◎近隣にお店がないので、屋食はあらかじめご持参ください。**

**参加者の皆様へ:**

- 年次大会・総会への参加登録は、以下の URL・QRコードの申し込みフォーム (Google フォーム) で行ってください。(返信用ハガキでの出欠確認はいたしません。) 学会ウェブサイトにもリンクがあります。また、学会員の皆様にはメールリストでもお知らせします。

・年次大会・総会申し込みフォーム: <https://forms.gle/peHDAxELE4okzrb76>



・日本通訳翻訳学会ウェブサイト: <https://jaits.jp/>

- 参加登録の締め切りは、8月31日(土)です(ただし、懇親会ご参加の場合は8月20日(火)まで)。(手話通訳をご希望される方は、準備の関係上、8月10日(土)までにご登録ください。)

**発表者の皆様へ:**

- 研究発表で使用する PC を各自でご持参ください。PC に HDMI の接続口がない場合は、必要なアダプタをご用意ください。いずれの場合も、発表開始までに余裕をもって準備をお済ませください。
- 資料を配布いただくことも可能です。配布なさる場合は、ご自身で必要部数(40部程度)をご準備いただき、当日ご持参ください。教室での配布については、必要に応じて会場スタッフがお手伝いをいたします。
- ポスター発表で掲出するポスターは、各自で印刷したものを当日ご持参ください。掲示スペースは、教室の壁で、縦 1150mm × 横 2940mm 以上のスペースです。コアタイム(ポスター発表会場に発表者が必ずいる時間)は2日目の 11:50-13:00 です。ポスターは、1日目の午前から掲示していただけます。
- 発表の内容に関して、個人情報や守秘義務、二重投稿/二重発表、無断引用などには十分ご留意ください。

**懇親会の参加申し込みについて:**

- 懇親会にご参加の方は、8月20日(火)までに、上記の年次大会申し込みフォームを通じて、懇親会の参加申し込みもしてください。当日の受付はいたしません。
- 懇親会費は、当日会場でお支払いください。

[第25回年次大会実行委員会]

藤濤文子(委員長)、伊原紀子、高橋絹子、朱藹琳、庄妍、サマーラ・マベリー

[大会プログラム担当理事]

齊藤美野

## 交通アクセス

阪急電鉄神戸線「六甲」・JR 神戸線「六甲道」から、  
神戸市営バス 16 系統「六甲ケーブル下」行きに乗車し、「神大国際文化学研究所前」下車  
(バス下車後、スロープを登って陸橋を渡ってお進みください)

◎神戸大学はキャンパスが点在しているため、お間違えのないようお願いします。  
「国際文化学研究所」を目指してきてください。

会場：神戸大学 鶴甲第 1 キャンパス



<https://www.kobe-u.ac.jp/ja/campus-life/general/access/rokko/tsurukabuto1/>

兵庫県神戸市灘区鶴甲 1-2-1

会場は鶴甲第 1 キャンパス K 棟で、地図中の⑮の建物です。  
懇親会は、キャンパス内の食堂で開催します。

第1日(9月7日) K202 11:10 – 12:20

### 基調講演

「文化の翻訳」と中東・イスラーム:文化人類学の視点から(仮題)

齋藤剛

(神戸大学国際文化学研究科教授)

### 要旨

「文化の翻訳」は、長年にわたって文化人類学の根幹をなす命題の一つとみなされてきた。この「文化の翻訳」の根幹をなす文化概念が、文化間の差異を強調し、分断をもたらす危険性を有しているとして批判に晒されたこともあり、「文化の翻訳」という命題は近年あまり論じられることがない。だが、移民や難民をはじめとした人の移動の増加と社会の流動性の高まり、多様な社会的・文化的背景を有した人の接触の機会の増加が認められる今日的状況において、「文化の翻訳」は、再検討に値する重要な課題の一つである。

本講演では、この「文化の翻訳」について、中東・北アフリカという地域やイスラームという宗教に着目しながら検討を進める。たとえば、日本は、欧米社会における理念や価値観を多年にわたって受容してきたが、その日本において、欧米社会に比べて歴史的関係が浅い中東・北アフリカおよびイスラームに関連する「文化の翻訳」を進めることはいかなる問題を有しているのか、また「文化の翻訳」をめぐる今日的意義はいかなるものであるのかといった点などについて検討を進めてゆきたい。

### プロフィール

社会・文化人類学、中東民族誌学などの立場から中東・北アフリカの最西端に位置するモロッコをフィールドとして研究。「イスラーム世界」に生きる人々について、実際に現地で暮らしながら理解を深め、中東・北アフリカやイスラーム圏の視点からヨーロッパに端を発する「近代」と呼ばれるものを捉え直す。博士(社会人類学)(東京都立大学)。日本イスラム協会理事。『「移動社会」のなかのイスラーム :モロッコのバルベル系商業民の生活と信仰をめぐる人類学』(2018年 昭和堂)、『ジェンダー暴力の文化人類学 : 家族・国家・ディアスポラ社会』(2021年 共著 昭和堂)、『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ 8 労働の理念と現実』(2024年 共著 明石書店)をはじめイスラーム世界、モロッコ、宗教、ジェンダー、移住などを巡る著書、論文多数。

司会

藤濤文子(神戸大学)

第1日(9月7日) A会場(K301) 13:30 – 14:00

A-1 司会: 篠原有子

マルチモーダルなテキストの翻訳研究：日中映像作品の字幕を中心に  
庄 妍 (神戸大学D)

デジタル技術の発展に伴い、視覚や聴覚を同時に利用する映像作品などのテキストが登場している。これらのテキストは、視覚・聴覚モードを言語・非言語の層と組み合わせられており (Díaz Cintas, 2008)、マルチモーダルなテキストと呼ばれる。張 (2009) は、選択体系機能言語学に基づき、文化層、コンテキスト層、内容層、表現層からなるマルチモーダル談話分析枠組みを提案した。モードの種類やモード間関係に関する研究は、マルチモーダル談話分析における主要な研究課題である (O'Halloran, 2011)。張 (2009) は言語・視覚・聴覚モードについて説明し、「相補」と「非相補」という2種類の関係を提案した。さらに、異文化要素の翻訳は翻訳上の課題として注目されており、マルチモーダルなテキストにおける異文化要素の翻訳はさらなる課題となる。

本研究の目的は、日中字幕における異文化要素の翻訳に注目し、異なるモードがどのように意味構築に関与しているかを解明することである。具体的には (1) マルチモーダルなテキストの分析枠組みを提案し、具体例の分析を通じてその有用性を検証する。(2) 異文化要素の意味構築に関与するモードを明らかにし、モード間関係について考察する。

研究目的 (1) については、張 (2009) をもとに分析枠組みを提案する。非言語モードも意味を表す機能を持つと考えられ、張 (2009) の分析枠組みは言語・非言語モードに同等の重要性と地位を与えることを特徴としている。一方で、字幕付き映像作品に適用するためにはモードの分類を調整する必要がある。

研究目的 (2) については、(1) で提案した分析枠組みを利用し、異文化要素の意味構築に関与するモードやモード間関係を分析する。例えば、人名や地名の字幕においては、言語視覚モード (字幕、看板など)、非言語視覚モード (登場人物の映像など)、非言語聴覚モード (効果音) が利用されている。モード間関係について、看板などの字幕が映像や効果音と同期し、強化の相補関係が観察される。映像内の文字情報に字幕をつけることで、その文字情報を目立たせる効果がある。

本研究では、マルチモーダルなテキストの分析枠組みを提案し、字幕翻訳の実例分析に適用してその有用性を検証する。マルチモーダルなテキストの翻訳研究により実用的な分析枠組みを提供し、多様なマルチモーダルなテキストの翻訳研究を促すことが期待される。

#### 【参考文献】

- Díaz Cintas, J. (2008). Introduction: Audiovisual translation comes of age. In Chiaro, D., Heiss, C., & Bucaria, C. (Eds.), *Between Text and Image* (pp. 1-9). John Benjamins.
- O'Halloran, K. 2011. Multimodal discourse analysis. In B. Paltridge & K. Hyl (eds.). *Continuum Companion to Multimodal Discourse Analysis*. London: Continuum. 120-137
- 张德禄. (2009). 多模态话语分析综合理论框架探索. *中国外语* (1), 24-30.

第1日(9月7日) A会場(K301) 14:10 – 14:40

A-2 司会: 篠原有子

A Journey from the Periphery: A Multimodal Analysis of *Shōjo* Manga Translations in the 90s  
Paula Martínez Sirés (Nihon University)

This presentation is part of an ongoing research project that examines the history and reception of manga translation in Spain with a focus on *shōjo* and *josei* manga. Although the first *shōjo* manga translated into Spanish, *Candy Candy*, was published in 1983, it would not be until the 90s when *shōjo* manga would diversify and attain a certain degree of popularity, partially thanks to emerging TV anime broadcasts.

This study thus endeavors to shed light on the diachronic evolution of translation trends of manga comics by examining *shōjo* manga in the Spanish context. The objective is to map the translation and editing trends of *shōjo* and *josei* manga (comics targeted to girls and young women, respectively) in the Spanish literary polysystem since its origins in the 80s to present times. For that purpose, a database of translated *shōjo* manga into Spanish has been created through fieldwork, visits to private collections, and consultation of open-access listings. The database, still ongoing, has over 130 titles, and it includes relevant bibliographic, textual, and paratextual information. The initial results deriving from the qualitative and quantitative analysis of the comic books and database have allowed to categorize four different trends in translation and editing formats of manga over a forty-year time span: a forerunner phase, followed by three different phases.

By relying on Even-Zohar's (1978/2021) polysystem theory, which considers that translated literature can occupy 'central' or 'peripheral' positions in a specific literary system, this presentation will first show how *shōjo* manga translation trends evolved in Spain during the forerunner phase and first phase from the 1980s to the late 1990s. Then, by relying on Valerio Rota (2014)'s categories, it will illustrate whether translations have been adapted to a local format, kept the original format, or changed into a different format. Ultimately, following a multimodal theoretical framework, which defends that manga translations should be evaluated not only from a linguistic component but also by considering their typographic, pictorial, and pictographic elements (Kaindl 1999), this presentation will examine the evolution of textual and paratextual elements of manga translations from Japanese into Spanish in order to decipher how manga went from occupying a 'peripheral' position in the Spanish literary polysystem, to implement its own idiosyncrasy.

Even-Zohar, I. (1978/2021). "The position of translated literature within the literary polysystem." *The Translation Studies Reader* (4th ed.), Lawrence Venuti (Ed.), pp. 191-196. London and New York: Routledge

Kaindl, K. (1999). "Thump, Whizz, Poom: A Framework for the Study of Comics under Translation," *Target* 11(2): 263-88.

Rota, V. (2014). "Aspects of Adaptation: The Translation of Comics Formats." *Comics in Translation*, Federico Zanettin (Ed.), pp. 79-98. London and New York: Routledge.

第1日(9月7日) A会場(K301) 14:50 – 15:20

A-3 司会: 篠原有子

Multimodal Analysis of Picturebook Translations: Examining the Visual and the Verbal in *The Boy and the Gorilla* Across Cultures

Cheng-Ting Chang (The University of Tokyo)

Over the past thirty years, research on translating texts for children has grown significantly. Traditional literary translation studies have typically focused solely on the verbal text. However, picturebooks, as “multimodal texts” (Kress and van Leeuwen 2006), convey meaning through the intricate interplay between verbal and visual elements. An ideal translation should thus recognize not only the importance of the original verbal text but also the interaction between the visual and the verbal (O’Sullivan 1999). Additionally, Riitta Oittinen et al. emphasize that crucial aspects of a book’s presentation include illustrations, the design and style of letters and headings, and the overall layout (2018, pp. 59-67). Therefore, typography and layout are integral to translation, contributing to a text’s overall impact. Nonetheless, these aspects are less explored in the field of translation studies.

To address this gap, this paper examines the two translations of *The Boy and the Gorilla* (2020), written by Jackie Azúa Kramer and illustrated by Cindy Derby. It compares the original English text to its Japanese translation, “悲しみのゴリラ,” and Traditional Chinese translation, “小男孩與大猩猩,” focusing on verbal translation, visual translation, and verbal-visual interactions. The aim is to show how subtle shifts can influence the overall effect of the text and reveal changes in ideologies across different cultures.

The picturebook depicts a mysterious gorilla entering a father-son household after the mother’s death. The gorilla’s identity and purpose remain ambiguous, inviting multiple interpretations. By scrutinizing the peritexts, as well as the visual and verbal texts and their interactions, it becomes clear that the interpretation of the story changes between the two translations. These distinctions affect the characterization of the boy and highlight the possible different views about childhood and adulthood in the two cultural contexts.

By analyzing the Japanese and Traditional Chinese translations of *The Boy and the Gorilla*, this paper emphasizes the significance of multimodal analysis when exploring picturebook translations. It suggests that subtle changes in both visual and verbal elements can affect the interpretation of picturebooks and the ideologies they convey.

Kress, Gunther and Theo Van Leeuwen. *Reading Images: The Grammar of Visual Design*. 2nd ed. Routledge, 2006.

O’Sullivan, Emer. ‘*Translating Pictures*’. *Signal* 90 (1999): 167-175.

Oittinen, Riitta, Anne Ketola and Melissa Garavini, eds. *Translating Picturebooks: Revoicing the Verbal, the Visual and the Aural for a Child Audience*. Routledge, 2018.

第1日(9月7日) A会場(K301) 15:30-16:00

A-4 司会: 山木戸浩子

英日ノンフィクション翻訳のパラテキストにみられる翻訳者のエージェンシー  
澤田 晶子(関西大学D)

本研究の目的は、ノンフィクション分野の英日翻訳書のパラテキストを分析し、パラテキストにみられる翻訳者のエージェンシーを考察するものである。本発表では、翻訳学におけるパラテキストならびにエージェンシーに関する先行研究を概観したうえで、パラテキスト分析によって浮き彫りとなる翻訳者のエージェンシーの事例を紹介し、本研究の意義を考察する。

ジュネット(1987/2001)は、序文や後書きなどの「テキストに伴う生産物」を「作品のパラテキスト *paratexte* と名付けた」(p.11)が、翻訳に関しては、STのパラテキストとみなすことを示唆することどまった。これに対して、Tahir-Gürçağlar(2002)らの翻訳研究者は、翻訳をテキストとして扱い、その周辺の素材をパラテキストとみなすよう主張する。この提言に従って2000年頃からパラテキスト分析を扱う翻訳研究は盛んになったが、大半は文学作品を対象としている(Batchelor, 2018, pp. 25-26)。

Paloposki(2009)は、翻訳者のエージェンシーが発揮される領域のひとつにパラテキストを挙げ、社会科学で用いられる用語であるエージェンシーは、翻訳学では“the willingness and ability to act”(Kinnunen & Koskinen, 2010)などと定義される。Paloposkiは、訳注や序文を挿入する翻訳者の役割を“paratextual agency”と呼んだ。

本研究では、ノンフィクション分野の英日翻訳書の一例として、第二次世界大戦後の占領期に占領軍部隊の一つである神奈川県軍政部が作成した *Monthly Military Government activities report* の翻訳、『神奈川県軍政部月例活動報告書: 教育及び民間情報 増補改訂版』(神奈川県立総合教育センターカリキュラム支援課, 2010)を取り上げ、パラテキストにみられる翻訳者のエージェンシーを分析する。ST内の記述の矛盾やSTの間違いの指摘、背景調査に用いた資料の提示など、翻訳の品質保証と翻訳プロセスの可視化を目的とする訳注や解説における記述は、パラテキストにおける翻訳者のエージェンシーが発揮されている例と考えられる。本発表では、このような例を紹介し、ノンフィクション翻訳分野における翻訳者エージェンシー研究の可能性と意義を議論する。

#### 【参考文献】

- Batchelor, K. (2018). *Translation and paratexts* (1st edition). Routledge.
- Kinnunen, T., & Koskinen, K. (Eds.). (2010). *Translators' Agency*. Tampere University Press.
- Paloposki, O. (2009). Limits of freedom: Agency, choice and constraints in the work of the translator. In J. Milton & P. Bandia (Eds.), *Agents of translation* (pp. 189-208). John Benjamins Publishing Company.
- Tahir-Gürçağlar, Ş. (2002). What texts don't tell: The uses of paratexts in translation research. T. Hermans (ed.), *Crosscultural transgressions research models in translation: V. 2: Historical and ideological issues*. (pp. 44-60). Routledge.
- ジェラルド・ジュネット(2001)『スイユ: テキストから書物へ』(翻訳:和泉涼一), 水声社, (Original work published 1987)
- 神奈川県立総合教育センターカリキュラム支援課(2010)『神奈川県軍政部月例活動報告書: 教育及び民間情報 増補改訂版 神奈川県立総合教育センター』神奈川県立総合教育センター

第1日(9月7日) A会場(K301) 16:10-16:40

A-5 司会: 山木戸浩子

翻訳修正に対する姿勢や修正方法への第一(最もスキルが高い)言語の影響  
Heather Glass (University of Melbourne M)

ISO17100をはじめとする国際翻訳品質保証基準には翻訳修正を含む「プロセス依存」翻訳が一般的に定められている。経験豊富な翻訳者でも間違いをする場合があることから、翻訳修正は、品質保証における重要な手順と位置付けられている。ヨーロッパの研究文献では、一般論として、「逆方向の翻訳修正」(第一(最もスキルの高い)言語以外の言語による翻訳修正)はベストプラクティスではないとされている。しかし、私自身の翻訳初心者としての日本での経験は逆だった。ネイティブとしてそれぞれ反対の言語を話す熟練の二人が相互協力することで最も高品質な翻訳が可能になると考えられていた。国際翻訳品質保証ではプロの翻訳者が常にいることを前提とする。しかし、多文化のオーストラリアでは、政府機関がコミュニティー情報の翻訳を委託する際、高資格の翻訳者がいると保証されておらず、まして、翻訳修正そのものが規定されていないため、修正が例外的な作業となっている。NAATIの翻訳者認定制度への依存が根深い「翻訳者依存」の翻訳(翻訳者一人で翻訳を仕上げる)により、高品質な翻訳が達成可能であるという前提である。コミュニティー領域における翻訳の主な特徴は、使用言語の多様性と、多くの言語において、翻訳者が英語を母国語とせず、正式な翻訳教育も受けていないことにある。翻訳者が両方向の翻訳を行い、たとえ、翻訳修正者が委託されても、第二言語による翻訳修正も日常的に行われている。この事実が、この研究を行うことになったきっかけである。もし、国際基準で高資格の翻訳者と翻訳修正者による修正を義務付けすれば、納品までの作業を一人で行う翻訳者に依存した高品質な翻訳を要求することも現実的ではないし、専門教育を受けていない翻訳者がそのような業務に携わるのであれば、まして現実的ではないだろう。本研究ではオーストラリア在住の和英・英和翻訳者を対象とした調査を行い、翻訳修正に関する経験や考え方を考察した。調査対象である50人の回答者のうち、10人の翻訳者に翻訳修正の仕事を依頼し、その成果物を60人ほどの英語ネイティブスピーカー(エンドユーザー)が読み、ランキングを行った。翻訳の作業を翻訳者が一人で行う方法や、最も基礎的な品質保証プロセスを踏襲する、翻訳者と翻訳修正者による翻訳を仕上げる方法の二種類の翻訳作業から得られた訳文に対するエンドユーザーの見解を調査した。主なデータ収集方法はアンケート、翻訳修正作業、ランキング作業、およびテキスト分析である。その後、翻訳修正者がターゲット言語のネイティブであるか、ソース言語のネイティブであるかによってできたプロセス依存翻訳原稿の品質に対するエンドユーザーの見解の違いを含め、質問を検討した。調査結果は修正の有効性と可視性に対する課題についてある程度の洞察を可能にし、同言語、反対言語の各翻訳修正者の修正方法、さらに、成果物に対して何が重要であるかに関する各翻訳者およびエンドユーザーの見解についての論評も可能となった。

第1日(9月7日) A会場(K301) 16:50-17:20

A-6 司会: 山木戸浩子

日中産業翻訳における求められるポストエディット能力:プロ翻訳者へのインタビュー調査より  
単 凱(東京工業大学D)、佐藤 礼子(東京工業大学)

今日、翻訳作業に機械翻訳が多用されるようになり、下訳作業が大きく縮減され、後工程としてのポストエディット(Post-editing, PE)の重要性が大きく高まるとともに、求められる作業・スキルが従来の翻訳実務に適合しなくなっている。従来のPEの能力としてのコア能力、言語能力、ツール利用能力が挙げられている(Rico & Torrejón, 2012)。本研究は、機械翻訳及びAIによる自動翻訳の翻訳精度が向上していく中で、産業翻訳において翻訳者に求められるPE能力を明らかにする。

本研究では、テキスト翻訳に携わる中国語母語のプロ翻訳者2名を対象に半構造化インタビューを行った。協力者Aは30代(実務経験8年)、Bは40代(10年以上)である。インタビュー項目は、産業翻訳のサービス状況、コンピュータースキル、PEプロセスで必要とされる能力などであった。

分析の結果、重要な能力として4点が挙げられた。

- 1) 言語能力:協力者A、Bともに起点テキストに対する理解力がPEの基礎であると述べた、特に、中日翻訳において、Aは母語理解力の重要性を強調し、Bは日本語の適切な接続詞と文末表現がより良い訳文に必要だと述べた。
- 2) 情報検索能力:機械翻訳が訳出した専門用語の確認(A)、目標言語の言葉遣いの確認と生成AIでの最終チェック(B)に必要な能力である。文化背景や専門知識の理解にも必要な能力である(A、B)。
- 3) 判断能力:翻訳直観(訳感(中); Translation Intuition)及び意思決定である。機械翻訳による下訳の違和感を瞬時に判断できることが重要であり(A)、長期間のトレーニングによって翻訳直観が育成される(A、B)。従来と比べてPEではより素早くより多くの訳文を作成する必要があり、訳文の決定に情報検索で得た情報とを関連させる能力が重要である(B)。
- 4) 職業能力:専門知識能力、用語整理能力、及び翻訳者としての職業素養(真剣さ、態度、時間厳守など)などが、ポストエディットの効率と正確性に影響を与える(A、B)。

本調査では、ツール利用能力(Rico & Torrejón, 2012)が必要な能力として挙げられなかった。一方で、情報検索能力と判断能力の重要性が示された。情報検索能力と言語能力は相互補完的であること、言語能力・情報検索能力が判断能力に影響を与えることなど、PE能力の間の相互作用が挙げられており、産業翻訳のPEでは素早い処理に向けた複雑な能力が求められることが示された。

#### 【参考文献】

Rico Pérez, C., & Torrejón, E. (2012). Skills and Profile of the New Role of the Translator as MT Post-editor. *Tradumàtica*, (10), 166-178.

第2日(9月8日) A 会場(K301) 10:00 – 10:30

A-7 司会: 齊藤美野

ノンバイナリー代名詞の日本語への翻訳—『少女、女、ほか』を例として  
古川 弘子(東北学院大学)

本発表の目的は、文学作品の中で使われる英語のノンバイナリー代名詞(nonbinary pronouns)が日本語にどう訳されているかを探ることである。

ノンバイナリー代名詞とは「男性か女性か」という2つの分類に縛られない代名詞で、ノンバイナリーの人などが使用しているものだ。これらの代名詞は「インクルーシブな代名詞」(ヤング, 2021)とも呼ばれ、様々な言語に取り入れられてきている。例えば、スウェーデン語では新しい三人称代名詞henが生まれ、2015年にはスウェーデン・アカデミーが発行する辞書に収録されるほど定着している。英語では、複数形 they の単数形としての使用が広がり、Oxford や Cambridge などの辞書にも語釈や用例が記載されているほか、ze, xe, ve, per などの新代名詞も生まれている。英語圏の大学の多くのウェブサイトでは、ノンバイナリー代名詞について学生向けの解説ページも設けられている(例えば、Ontario Tec University などが分かりやすく解説している)。ノンバイナリー代名詞は学術的にも影響を与えており、2022年には学術誌 *Journal of Language and Sexuality* で特集が組まれた。近年では、スウェーデン語や英語にとどまらず、スペイン語(López, 2022)やドイツ語(Lardelli, 2023)への翻訳に関する研究も行われている。

この動きは文学にも広がり、ノンバイナリー代名詞が使われた文学作品も増えてきた。しかしながら、三人称単数代名詞の日本語の訳語は「彼」と「彼女」しか存在していない。そのため、ノンバイナリー代名詞を日本語に翻訳するには困難が伴うと予想できる。これは日本語への翻訳を考える上で重要な点であるが、まだ研究が活発に行われているとはいえない。

そこで本発表では、イギリスの小説 *Girl, Woman, Other* (Evaristo, 2020)と、その日本語訳『少女、女、ほか』(エヴァリスト[著], 渡辺[訳], 2023)の比較分析を行い、ノンバイナリーの登場人物に対する代名詞の翻訳について考えたい。2019年度ブッカー賞受賞作である本作品には12人の女性が登場するが、そのうちの1人、Megan は物語の途中で自らをノンバイナリーと認識し、名前も Morgan と変える。同時に、自らに対する代名詞も she から they とする。日本語訳ではこの Megan/Morgan の代名詞がどう訳されているのかについて、定性・定量分析を行う。その上で、この翻訳の問題について翻訳理論や語用論などの理論面からの考察も行いたい。

#### 【参考文献】

- Evaristo, Bernardine (2020) *Girl, Woman, Other*. London: Penguin
- Journal of Language and Sexuality* (2022) ‘Nonbinary pronouns as a site of advocacy in research and teaching’ Volume 11, Issue 2.
- Lardelli, Manuel (2023) Gender-Fair Translation: a Case Study Beyond the Binary. *Perspectives*.
- López, Artemis (2022) Trans(de)letion: Audiovisual Translations of Gender Identities for Mainstream Audiences. *Journal of Language and Sexuality* (2022) ‘Nonbinary pronouns as a site of advocacy in research and teaching’ Volume 11 Issue 2.
- Ontario Tec University (2024) *Pronouns (Student Life)* <https://studentlife.ontariotechu.ca/current-students/equity-and-inclusion/resources/pronouns.php> (viewed on 27 May 2024)
- エリス・ヤング著、上田勢子訳(2021)『ノンバイナリーがわかる本—he でも she でもない、they たちのこと』明石書店
- バーナディン・エヴァリスト著、渡辺佐智江訳(2023)『少女、女、ほか』白水社

第2日(9月8日) A会場(K301) 10:40-11:10

A-8 司会: 齊藤美野

重訳 (relay translation)——韓国絵本『トッケビのこんぼう』と『さびしがりやのトッケビ』を題材に  
尹 惠貞(一橋大学)

2023年9月の学会大会では、絵本作家長谷川義史が翻訳した韓国のペク・ヒナの絵本作品群(ブロンズ新社刊)と、カナダのジョン・グラッセンの絵本作品群(クレヨンハウス刊)に分類し、長谷川の翻訳的営為が「重訳」に当たるのかを長谷川のインタビュー内容及び Dollerup, Cay (2014)の重訳理論から分析・考察した(尹, 2024)。

本年度の発表では、韓国/朝鮮の妖怪であるトッケビの名を持つ絵本作家ハン・ビョンホの作品、『トッケビのこんぼう』(2003)と『さびしがりやのトッケビ』(2006) (両者ともに平凡社刊)を取り上げる。この2作品は、絵本の研究者であり、絵本の翻訳も手掛ける藤本朝巳(ふじもとともみ)が翻訳をしている。藤本は主に英米の絵本を日本語に翻訳している翻訳家である。例外としてこの韓国の絵本を翻訳していると言えるであろう。この2冊の絵本は、前述した長谷川の翻訳作品とは異なり、奥付の書誌情報に翻訳協力者が明記されているという特徴がある。また、もう一つの特徴としては『トッケビのこんぼう』は英語翻訳版(2003)があり、『さびしがりやのトッケビ』は英語翻訳版がないということを上げることができる。

以上を前提に、藤本には2024年3月に既にインタビューを行った。そのインタビューの内容を紹介しながら、藤本の翻訳的営為が「重訳」に当たること、及び長谷川の翻訳作品との違いも明らかにしつつ、分析対象が絵本であると言う特殊性についてさらに簡潔明快に説明できるようにつとめたい。

#### 【参考文献】

Dollerup, Cay. 2014. Translation for Reading Aloud. *Meta*, XL VIII, 1-2, 81-103.

Dollerup, Cay. 2014. Relay in Translation. *St. Kliment Ohridski University Press*. 21-32.

藤本朝巳(2007)『絵本のしくみをかんがえる』日本エディタースクール出版部

藤本朝巳(2010)『昔話と昔話絵本の世界』日本エディタースクール出版部、新装版第2刷

藤本朝巳・生田美秋編(2018)『絵本を読み解く絵本入門』ミネルヴァ書房、pp.19-26.

尹惠貞(2024)「重訳の再考—絵本作家「長谷川義史」の翻訳作品—」『通訳翻訳研究』23、pp.129-142.

第2日(9月8日) A 会場(K301) 11:20 – 11:50

A-9 司会: 齊藤美野

戦後の理科教材翻訳に見られる評価表現:創造的コミュニケーションの可能性  
野原 佳代子(東京工業大学)

日本は、一般市民が科学リテラシーを身に着ける方法やツールについて、多くを欧米から輸入してきた。2005年が日本における元年と言われる「科学コミュニケーション」は、科学をめぐる専門家とその他方向性の違う人々の架け橋を作ることを意味するが(奥本・種村, 2022, pp.2-4)、その方法論は英国を中心に進化し後に文科省主導で日本に広まっている(Norton・Nohara, 2018, pp.28-32, 40-43)。近年、地球温暖化やコロナ禍をはじめ、対応に科学的知識が求められる課題が山積し、科学コミュニケーションは必要不可欠な活動となっている。

科学ジャンルのテキストに見られる、論理構成・ファクト重視、心理的評価表現の少ないディスコースは、一般読者にとっては自己との接続点が見つけられず内容に共感することが難しい。それでは、科学が一般や子供も興味を持ちうる開かれたコンテンツであるために、どのような文体を用いることが可能だろうか。

この問いを歴史的に検討するのに参考になる初期の科学コミュニケーションの例として、第二次世界大戦後、占領軍の指導のもとで翻訳された『小学生の科学』(1949 大阪教育大学所蔵)がある。これは戦後初期の貴重な資料でありながら、翻訳学においては十分に分析対象とされておらず起点テキストも特定されていない。米国発の複数の教材がベースにある一方、編纂チームによる創作も織り込まれている(野原・仲矢・中山, 2015, p.30)。

起点テキストのひとつに B. M. Parker 著 *The Basic Science Education Series* (1941) がある。『基礎科学教育叢書』という名で日本語訳されているが、一部『小学生の科学』上にも継承されている。思想的要素を排除し科学的事象を伝えながらも、子供たちに科学に興味を持たせ国を前進させる新しい戦後教育の試みは、翻訳を通してどのようなディスコースを生み出したのか。本発表では『小学生の科学』を取り上げ、とくにアプレイザル理論(佐野, 2012, pp. 174, 175)を指標として分析し、科学を題材とした軽い読み物(light reading material)としての文体的特徴を考察する。読者の主観的心理にも触れ独特の世界観を見せるディスコースのあり方は、試行錯誤の続く日本の科学コミュニケーション実践に、時を超えて興味深いヒントを与えてくれるのではないか。

#### 【参考文献】

- 奥本素子・種村剛 (2022) 『まだ見ぬ科学のための科学技術コミュニケーション』 共同文化社
- Norton, M. and Nohara, K. (2018) *Talking Science across Borders*. Tokyo Institute of Technology, Severn-Beyond print.
- 野原 佳代子・仲矢 史雄・中山 実 (2015) 「戦後の理科教材の翻訳と編纂に見られる早期科学リテラシー教育について」『翻訳研究への招待』 vol.13, pp29-52.
- Martin, J. R., and White, P. R. R. (2005). *The language of evaluation: Appraisal in English*. New York: Palgrave Macmillan.
- 佐野大樹 (2012) 「アプレイザル理論を基底とした評価表現の分類と辞書の構築」『国立国語研究所論集』第3巻: 53-83, pp.174-177.

第2日(9月8日) A会場(K301) 13:00 – 13:30

A-10 司会: 辛島デイヴィッド

日中対訳用語集構築に向けた翻訳の規準と手続きの明確化:被災者支援分野を対象に  
朴 恵(東京大学)、山浦 育子(愛知県立大学M)、宮田 玲(東京大学)

地震等の災害時における被災者支援情報の翻訳を迅速に行う上で、対訳用語集の活用が有効であるが、この分野で確立した用語集はほとんどないだけでなく、そもそもどのように対訳用語集を構築すればよいかの知見が広く共有されていない。翻訳方略に関する研究では、用語の翻訳に役立つ知見も提示されているが(例えば、Molina and Hurtado Albir (2002)など)、記述的な分析が中心であり、方略適用の手続きは十分定式化されていない。欧州委員会における用語集翻訳に関する報告の中では、一貫性、正確性、明快さの3つの翻訳規準が挙げられているが、それぞれに対応する翻訳の方法については例示に留まる(Stefaniak, 2017)。

以上の背景をふまえ本研究では、被災者支援情報の日中対訳用語集を構築する試みを通じて、そこで観察された用語集の翻訳に関する規準と手続きの明確化を行った。情報源として、「石川県 令和6年能登半島地震 支援情報ナビ」(株式会社アスコエパートナーズ・一般社団法人ユニバーサルメニュー普及協会, 2024)で提供される日本語テキストデータ(重複文を除外した合計1,345文、36,307文字)を用いた。まず、著者の一人が、手作業で日本語用語(固有表現も含む)を抽出し、473語の用語集を構築した。これを別の著者が簡体字中国語に翻訳した。さらに別の著者がその結果をチェックしながら、用語集の日中翻訳ガイドラインを作成した。最後に著者全員で協議し、翻訳結果とガイドラインの改良を行った。

ガイドラインは、「公式訳がある場合はそれに準拠する」「日本語の漢字をなるべく踏襲する」といった指針を具体例とともに明文化したものである。さらに、翻訳が満たすべき規準として、個々の用語に関する規準(規範性、正確性、形式的妥当性、理解容易性、参照可能性、用語性、通用性)および用語間に関する規準(一貫性、識別性)を定め、各指針と対応づけた。これにより、規準の優先度を考慮した指針適用の手続きが明確になるのみならず、重視する規準に応じた複数の妥当な訳語の作成が可能となる。例えば、「再生手続」という語は、参照可能性を重視し漢字を踏襲した「再生手続」という訳語と、日本の社会慣習に不慣れな人にとっての理解容易性を重視した「重整手続」という訳語の両方が可能である。

本発表では、用語集翻訳の手順と結果を説明した上で、翻訳の指針と規準の関係を整理する。また、提案する規準と手続きの他言語・分野への展開可能性についても議論する。

#### 【参考文献】

- Molina, L., & Hurtado Albir, A. (2002). Translation techniques revisited: A dynamic and functionalist approach. *Meta*, 47(4), 498–512.
- Stefaniak, K. (2017). Terminology work in the European Commission: Ensuring high-quality translation in a multilingual environment. In T. Svoboda, L. Biel & K. Łoboda (Eds.), *Quality aspects in institutional translation* (pp. 109–121). Language Science Press.
- 株式会社アスコエパートナーズ・一般社団法人ユニバーサルメニュー普及協会 (2024).「石川県 令和6年能登半島地震 支援情報ナビ」コンテンツデータ(2024年2月8日時点). <https://aidfor.ishikawa-pref.supportnavi.jp/#about>

第2日(9月8日) A会場(K301) 13:40 – 14:10

A-11 司会: 辛島デヴィッド

多言語情報発信を支援する自治体横断型翻訳資源の構築:プロジェクトの理念、枠組み、現状  
宮田 玲(東京大学)、阪本 章子(関西大学)、藤田 篤(情報通信研究機構)、香川 璃奈(産業技術総合研究所)

自治体は多様な言語的背景を持つ住民に対して、生活に関わる重要な情報を提供する役割を持つ。各自治体は多言語での翻訳サービスの提供に努めているが、予算等の制約から、必ずしも十分なサービスを提供できていない。日本の全自治体のウェブサイトを対象にした 2019 年時点の調査によると、約 73%の自治体で機械翻訳が導入されているものの(宮田, 2020)、機械翻訳の結果が修正されることは少なく、誤訳が引き起こしうる問題も指摘されている。一方、災害情報や行政手続き情報をはじめ自治体が発信する情報は、当該自治体の過去の情報だけでなく、他の自治体が発信する情報とも類似している場合があるため、翻訳の際にそれらを自治体横断的に活用することが有効だと考えられる。例えば、対訳辞書や対訳コーパス等の翻訳資源を構築すれば、人手翻訳・機械翻訳いずれの手段の翻訳においても活用できるため、翻訳の量的な拡大と質的な改善が期待できる。

そこで我々は、自治体の翻訳サービス拡充、ひいては言語的な情報格差の解消に向けて、既存の翻訳結果をベースに翻訳資源を構築し、自治体横断的に使える形で公開するプロジェクトを開始した。具体的には、文書・文・用語レベルの翻訳資源として、それぞれ、翻訳文書アーカイブ(適切なメタデータを付与した対訳文書の集合)、拡張翻訳メモリ(文書との対応が保持され、内容・スタイル・用語が統制された対訳文の集合)、統制対訳用語集(標準的な表記を定めた対訳用語集)を構築する。さらに、構築した翻訳資源の利用を促進すべく、翻訳資源の活用ガイドライン、検索ツール、分野特化型機械翻訳モデルの開発と公開を行う。

本プロジェクトは、翻訳に関する知識・資源の明示的な共有と活用を目指す試みと位置づけられる。また、文書の単位を中心に据える点に特徴がある。具体的には、翻訳メモリにおける文脈情報の欠落問題(Schneider et al., 2018)に対する方法論的な解決策の提案や、文脈を考慮した機械翻訳(Maruf et al., 2022)の研究開発に役立つ資源の提供につながるものである。

本発表では、我々のプロジェクトの理念と枠組みを説明した上で、翻訳資源の構築・利用に関する個別事例や自治体の翻訳業務における課題・ニーズの調査について報告する。また、分野・業界をまたいだ連携に関する今後の展望と課題を述べる。

#### 【参考文献】

- Maruf, S., Saleh, F., & Haffari, G. (2022). A survey on document-level neural machine translation: Methods and evaluation. *ACM Computing Surveys*, 54(2), 1–36.
- Schneider, D., Zampieri, M., & van Genabith, J. (2018). Translation memories and the translator: A report on a user survey. *Babel*, 64(5/6), 734–762.
- 宮田玲 (2020). 「日本における自治体ウェブサイトの多言語化の現況と課題」『通訳翻訳研究』20, 1–24.

第2日(9月8日) A会場(K301) 14:20-14:50

A-12 司会: 辛島デイヴィッド

政治文献における“工作”の和訳に関する研究

董 海濤(北京外国語大学)

中日両国の文化交流により、両国の言語間には数多くの同形語が存在する。学習者にとって、同形語の翻訳は便利に見えるが、実は大きな罣になってしまうことも多い。これまで、同形語に関する研究が多く行われてきたが、政治文献に出現する頻度の高い“工作”に関する和訳の研究はまだ少ない。本研究は、『習近平 国政運営を語る』第一巻における“工作”の日本語訳について分析する。まず、『習近平 国政運営を語る』多言語データベース総合プラットフォームを用いて、『習近平 国政運営を語る』第一巻の“工作”を含めたコンコーダンスラインを抽出し、和訳本と照らして中日パラレルコーパスを作成する。そして、原文と訳文を統計・分析・分類することで、翻訳のパターンを模索する。

『習近平 国政運営を語る』第一巻の中で、“工作”は合計 322 回出現し、38 種類の訳し方が存在している。これらの訳し方を同形語、非同形語、省略に分けることができる。政治的な忠実性と“宣传思想工作”の専門用語的な性質を考慮した上、同形語の「工作」に翻訳されていると考えられる。非同形語にはさらに意味範囲内、意味範囲外の 2 種類がある。省略にはコロケーションと重複の 2 種類がある。結果を分析・整理することで、翻訳パターンを次のようにまとめる。訳文が名詞である場合、職業に関連するかどうかで、「仕事」をはじめとする訳し方と「活動」をはじめとする訳し方に分けることができる。訳文が動詞である場合、「働く」や「仕事する」といった表現を選択するか、「仕事」の名詞的用法を使用し、他の動詞と組み合わせることで多様な訳文を作ることもある。また、文脈を細かく分析した上、“工作”の意味範囲外の言葉で翻訳することもある。

#### 【参考文献】

- [1] 日本文化庁. 中国語と対応する漢語[M]. 東京: 大蔵省印刷局, 1978.
- [2] 王燦娟. 「日中同形語に関する研究—『工作』の意味形成と異同をめぐって—」, 『東アジア日本語教育・日本文化研究』(東アジア日本語教育・日本文化研究学会誌) 第十四輯, pp. 69-96. 2011

第1日(9月7日) B会場(K302) 13:30 – 14:00

B-1 司会: 石塚浩之

高等教育における「コミュニティ通訳者育成プログラム」について: 京都外国語大学の取り組み  
佐藤 晶子(京都外国語大学)、楊 蕾(京都外国語大学)

コミュニティ通訳とは、公共サービスの提供場面において、言語の異なる当事者間のコミュニケーションを仲介する通訳であり、医療、教育、行政、司法などの分野で活用されている。『ISO13611:2014 通訳—コミュニティ通訳のためのガイドライン』は、コミュニティ通訳を「公共サービスの利用を目的として、コミュニケーションの場面において、異なる言語の話者間で行われる双方向の通訳」(ISO, 2014, p.2)と定義している。

コミュニティ通訳と会議通訳の主な相違点は、通訳の方向性と、専門性の違いである。会議通訳は主に一方向の通訳(B言語→A言語)を行うのに対し、コミュニティ通訳は双方向(B言語⇄A言語)の通訳が求められる。また、会議通訳は専門性が高いのに対し、コミュニティ通訳は状況に応じた柔軟な対応が必要とされる。

本発表では、高等教育機関のカリキュラムにおけるコミュニティ通訳者養成システムの構築を目的とし、京都外国語大学で実施されている取り組みを報告する。具体的には、2022年度から開講されている「コミュニティ通訳特論 I」の授業内容や学生アンケート結果の分析、さらに医療、学校教育、異文化理解、行政等の分野で実施する言語運用能力テストについて詳述する(林田, 佐藤, ラムスデン, 楊, 三好, 2024, pp.3-8)。

同大学は2023年4月公益財団法人京都市国際交流協会と包括協定を結び、実践的な行政通訳に関する授業の提供、同協会が行なっている外国人カウンセリングデイにコミュニティ通訳業務の見習いとして学生がオブザーバーとして参加するなどの活動を進めている(京都外国語大学, 2024a)。さらに同大学は、2024年度入学の全学科学生を対象に「コミュニティ通訳者育成プログラム」を設置した(京都外国語大学, 2024b)。また、2024年度4月より京都外国語大学の2学部全学科教員が賛同し、コミュニティ通訳研究会が立ち上がった。

これらの取り組みを通じて、学生の言語運用能力向上と、実践的なコミュニティ通訳の知識・技能の習得、OJTの充実を目指している。本発表により、高等教育機関における総合的なコミュニティ通訳者育成プログラムの構築に資する知見を会場の皆さんと共有できれば幸いである。

#### 【参考文献】

ISO (2014) *ISO13611:2014 Interpreting—Guidelines for Community Interpreting*. 2.

京都外国語大学英米語学科 (2024) 「『外国人のためのカウンセリングデイ 2023』— コミュニティ通訳体験」『京都外国語大学・短期大学』2024/01/05 : (<https://www.kufs.ac.jp/blog/department/english/detail/2260>)

京都外国語大学 (2024) 「学生便覧」『京都外国語大学』 ([https://www.kufs.ac.jp/universitylife/pdf/handbook2024\\_03.pdf](https://www.kufs.ac.jp/universitylife/pdf/handbook2024_03.pdf)):111.

林田雅至、佐藤晶子、ラムスデン多夏子、楊蕾、三好マリア(2024)「『ISO13611:2014 通訳—コミュニティ通訳のためのガイドライン』認証取得のための言語運用能力を測る言語別適正テスト問題(英一日、露一日、葡一日、中一日、仏一日)の作成 : 京都外国語大学コミュニティ通訳者育成プログラム実施に向けた取り組み (コミュニティ通訳(6))」『大阪大学学術情報庫』:1-10.

第1日(9月7日) B会場(K302) 14:10 – 14:40

B-2 司会: 石塚浩之

大学院コミュニティ通訳学コースの取り組み:「顕在的機能」と「潜在的機能」からの考察  
吉田 理加(愛知県立大学)、糸魚川 美樹(愛知県立大学)

日本の大学・大学院における通訳教育に関して実態調査や実践報告がなされてきた(染谷他, 2005; 高橋他, 2022; 西畑, 2022)。大学・大学院における通訳研究・教育は理論系の講義と通訳現場における実践を学ぶ演習や実習などの学びをいかにバランスよく提供できるかが課題になっている。本発表では、愛知県立大学国際文化研究科に2022年に開設された「コミュニティ通訳学コース」で、講義や実習を通して学外の専門機関と連携を図ると同時にコミュニティ通訳トレーニングでは扱われることが少ない同時通訳スキルの訓練を行うなどの取り組みがなされてきたことを報告する。そして、社会学者のマートン(2005/1964)が「顕在的機能」と「潜在的機能」と呼んだ効果/機能が見られたことについて議論する。つまり、ある出来事には、明らかに期待される機能(顕在的機能)の他にも、意識に上りにくい機能(潜在的機能)があり、重要な役割を果たしているということである。

愛知県立大学国際文化研究科の「コミュニティ通訳学コース」には、現在、日本語と英語、中国語、西語、葡語、タガログ語、越語の9名のコース履修生が在籍している。全員がコミュニティ通訳者であり、社会人院生である。しかし、その殆どが入学時には同時通訳経験を有していない。

本コースで外部機関との連携を図っている授業科目に「多言語多文化実務論」と「コミュニティ通訳実習」がある。前者は、医師、弁護士、教師、コミュニティ通訳者などの実務家を講師に迎え通訳ユーザーとしての専門家の立場から、通訳者が知っておくべき基礎知識について講義がなされるものである。後者は、事前研修として座学を6コマ、現場通訳実習を36時間以上実施するものである。実習は学内外で実施しており、学内では実際に通訳をし、学外では通訳者を介した対応の見学が多い。

外部機関と連携して実施している上記科目において学びを深めたのは、コースに在籍する院生だけではなく、講義を担当した実務家も院生(コミュニティ通訳者)との質疑応答を通じて、「通訳者側の視点」に触れ、視野が広がった。実習においては、学んだ通訳技術を実践する経験を積むだけではなく、実習の場である講演会などへの一般参加者が通訳に関して知識を深めるきっかけにもなった。このように、当初から明らかに期待していた機能(顕在的機能)以外の効果もたらされたといえる。

【参考文献】

- 西畑香里(2022)。「オンラインによる同時通訳実習の企画と実践—学部・大学院のコラボレーション授業の事例から—」『東京外国語大学論集』103号, 51-67頁。
- マートン, R. K. (著) 森東吾・金沢実・森好夫(訳)。(2005/1964)。「現代社会学体系 13 社会理論と機能分析」青木書店。
- 染谷泰正・斎藤美和子・鶴田知佳子・田中深雪・稲生衣代(2005)。「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳研究』5号, 285-310頁。
- 高橋絹子・大井川朋彦・石塚浩之・稲生衣代・内藤稔(2022)。「日本の大学・大学院における通訳関連科目に関する全国調査報告」『通訳翻訳研究』22号, 91-112頁。

第1日(9月7日) B会場(K302) 14:50 – 15:20

B-3 司会: 石塚浩之

コミュニティ通訳トレーニングアプリの需要と課題:自治体・学生アンケートからの考察

水野 真木子(金城学院大学) 岡部純子(大阪国際中学校高等学校 兼 フリーランス)

近年の在留外国人の増加を背景に、各地の自治体の国際交流担当課や国際交流協会を中心に、コミュニティ通訳者養成および認定のプログラムが整備されつつある。しかし、英語を中心とする会議通訳に比べ、来日外国人の国籍や使用言語は多様であることから、多くの通訳者養成プログラムでは、分野別知識、通訳倫理、ノートテイキング等の一般的通訳スキルの研修を中心に、参加者の共通語である日本語を媒介して行われており、言語別の訳出トレーニングを行うことが難しいのが現状である。このような状況に対する一つの解決策として、発表者らは個人でできるオンラインの言語別通訳トレーニングアプリの開発を考え、コミュニティ通訳に典型的な場面をいくつか選び、英語、中国語、ベトナム語、スペイン語、ポルトガル語、タガログ語で試作品を作った。筆者らは2011年の司法通訳 Web 教材制作時には Flash (Adobe 社) を使用したが、コミュニティ通訳アプリ制作時には小島一秀氏(大阪大学)が開発したオーサリングツールを使用した。

本研究では、国際交流協会等を対象とする通訳者トレーニングに関するアンケート調査を行ったが、その回答から多くの団体が言語別通訳トレーニングの必要性を感じているが、実際には困難であると認識していることが分かった。また、実際にトレーニングアプリのサンプルを使用してもらい、そのようなアプリが実際に役立つかどうか、どのような形態での使用が便利か、どの程度の需要があるのか、改善点は何かなどについても回答してもらった。さらに、大学の通訳コースの学生たちにもアプリを使用してもらい意見を収集した。その結果、以下の点が重視されていることが明らかになった。(1) スマートフォンで、わかりやすい操作で、現実味のある練習をすること。(2) 多様な場面の練習をしつつ、レベルを上げること。(1) の点についてはアプリの技術的改善による対応を試みた。(2) の点については今後の継続的な開発による対応が課題となっている。

本発表では、開発したコミュニティ通訳トレーニングアプリを紹介するとともに、アンケート調査で明らかになった使用者の観点からの意見や課題、今後の需要とアプリの効果的な使用法やコンテンツについて論じる。

小島 一秀, 村山 健二, 岩成 英一, 高橋 明,

”外国語による対話と交渉を学ぶためのシミュレータ教材の開発”,

第8回情報科学技術フォーラム講演論文集 第4分冊, N-001, pp.477-480, 2009/8/20

第1日(9月7日) B会場(K302) 15:30 – 16:00

B-4 司会: 吉田理加

助産師外来における質問—応答連鎖における通訳者の戦略:段階的訳出の組み立てについての考察

飯田 奈美子(立命館大学)

助産師外来の目的は、助産師が妊婦の健康観察や栄養摂取指導、分娩説明等を行う「指導」という活動に志向した相互行為が行われている。助産師は母子の健康状態や分娩に必要な情報を把握するために、問診を行う。通訳を介したコミュニケーションの場合は、助産師の質問の後に通訳者の訳出が入る。通訳者は助産師の質問の意図を把握し、限られた時間の中で、助産師が必要とする情報を妊婦・家族に的確に返答してもらえるように質問を組み立てる戦略を用いている。このような戦略は、通訳者が助産師・妊婦等と協働してその場のコミュニケーションを構築していくことによって、助産師—妊婦等の関係性強化に貢献できるものであると考える。しかし、どのような戦略が貢献するものになるのか、また不適切で問題になるのかが明確にされていない。そこで、本研究では、助産師外来における通訳を介した会話場面において、助産師が妊婦等に対して行う質問を、段階的に訳出(質問)していく現象を抽出して分析し、どのような作用があるかを明らかにし、通訳者の戦略を明確化していきたい。

研究方法は、外国人集住地域にある有床診療所(産婦人科)の助産師外来にて、助産師と外国人妊婦の会話を病院勤務の通訳者(ポルトガル語母語話者:当該診療所で25年勤務)が通訳をしている場面を録音・録画し、社会学エスノメソドロジー・会話分析を用いて分析を行った。

今回、注目した現象は、発表者が「段階的訳出」と名付けた通訳者の訳出戦略である。これは、助産師の質問が極性質問の形式で質問されているが、質問内容において複数意味がとれる場合に、通訳者が段階的に一つ一つ答えてもらえるように質問をデザインする訳出方略である。助産師の質問は、「最適化」(Boyd&Heritage2006)がなされるように質問が組み立てられている(質問が「最良の場合」や「問題なし」の結果に対する傾きをもつように優先性が組み込まれている)が、通訳者の段階的訳出により、妊婦がより症状を詳しく説明できるようにしていることがわかった。これは、助産師の質問の行為アジェンダとは異なる行為アジェンダとしての返答を引き出すことで、助産師の質問の意図(問診で得たい情報)を妊婦等に理解させることができ、さらに助産師にとっても意図した狙いを得た回答が返ってくることで、助産師外来での指導という目標をスムーズに達成していると考えられる。

Boyd&Heritage (2006) Taking the history: Questioning during comprehensive history-taking. ed. John Heritage, Douglas W. Maynard, *Communication In Medical Care*, Cambridge University Press.

第1日(9月7日) B会場(K302) 16:10 – 16:40

B-5 司会: 吉田理加

医療通訳者の聞き返し方略と会話への影響に関する研究  
森田 直美(東京大学)、橋本 英樹(東京大学)

### 【背景・目的】

医療通訳は、異なる言語背景を有する患者・家族と医療従事者の間で医療サービスの適切な提供を確保するために必須であり、医療通訳者には高度な通訳技術と倫理規定に準じた行為が要求される。従来その要求に応えるために、正確性を重視した翻訳機械のように訳出する「導管モデル」(Reddy, 1979)が提示されてきた。特に誤訳は患者の命に影響しかねないため、原発言に不明瞭な点があれば通訳者は発話者に「聞き返し」、確認してから訳出を開始する。しかし業務で日常的に繰り返されるこの通訳者の「聞き返し」に注目した研究は知る限りない。

本研究の目的は、通訳者が「聞き返し」をどのような意図で使い、また「聞き返す」ことが会話に影響を与え得るのかを進行する会話を分析し明らかにすることである。

### 【方法】

対象者である医療通訳者 8 名と研究補助者の医師と患者役各 4 名は選定・除外基準を設け、機縁法を用いて探した。患者役は、日本語能力が低く医療通訳を必要とするであろう在日外国人に依頼した。模擬面接は、診察目的、場面設定、属性は固定とし、あとは自由に会話をしてもらうオープン・ロールプレイを用いた。通訳者(Zoom による遠隔通訳 7 名、対面通訳 1 名)には、模擬面接で医師と患者役の日本語と英語の会話を通訳してもらい、得られた録音・録画ならびにトランスクリプトをデータとして、会話分析(Conversation Analysis)の手順に従い分析をした。本研究は所属機関の倫理委員会の承認を受け実施した(2021300ND)。

### 【結果】

抽出の内訳は、医療通訳者による「聞き返し」が 57 件、患者が通訳者に聞き返したものが 6 件、医師が通訳者や患者に聞き返す発話はなかった。医療通訳者による聞き返し 57 件を原因別に区分し、代表的な抜粋を会話分析的に詳述し、「聞き返し」をきっかけに通訳者と医師あるいは患者間で開始される発話連鎖と相互行為を分析し、結果を得た。

### 【考察】

「聞き返し」は、単に単語や発音を確認し、通訳者自身が「導管」としての役割を保持するために実行されているだけでなく、会話を調整する社会的機能のきっかけでもあった。しかしこの機能は、通訳者の「聞き返し」の意図を受け手が理解して初めて成立することも示された。つまり通訳者は、「導管」として訳出のみ専念しているのではなく、発話者として受け手との会話のやり取りを通して相互行為を成立させ、会話に影響を与え得る存在であった。今後、通訳者の社会的機能研究が求められる。

### 【参考文献】

- Reddy, M. J. (1979). The conduit metaphor: A case of frame conflict in our language about language. In A. Ortony (Ed.) *Metaphor and Thought*. 284-310. Cambridge: Cambridge University Press.  
溝口良子(2009)「通訳者の役割モデルの研究—6つのスタイルと2つの機能—」『通訳翻訳研究』9号:71-86.

第1日(9月7日) B会場(K302) 16:50-17:20

B-6 司会: 吉田理加

誤訳と誤差の間: 日英同時通訳における誤差の概念と許容内容解析  
セランド 修子(東京女子大学)

本発表では、通訳行為は完全ではないこと(鳥飼, 2004, p.52; 小松, 2005, p. iv 他)、また、ごく限られた時間内で訳出を行う同時通訳ではなおのこと、誤差が元々避けがたく存在することを前提とし、入手できる最新の同時通訳音声を用いて、以下に定義の誤差解析を行う。本研究の目的は、報道で用いる専門同時通訳者の訳出を検証し、誤差の傾向を浮き彫りにすることである。正確度の高さから訳出を測るのではなく、あくまで人間の本質に元々ある許容範囲の意識から訳出を検証してその傾向を探り、同時通訳者が陥る訳出誤差の傾向を明らかにする。

本研究における「同時通訳の誤差」の定義は、審議のやり直しが要求される等、大勢に影響する誤訳(朝日新聞, 2016)、或いは、後世の検証により明らかになった誤訳(鳥飼, 2004)(中村, 2011)ではなく、一般に広く知らしめる報道目的やコミュニケーションの仲介目的という規範を十分に果たしているものの、より正確な訳が明らかに存在するような訳出をさす。この考え方は、「誤訳」の英語翻訳である”error”には、二つの意味があり、a) 定量的な測定値上の「誤差」(或いは「公差」著者追記)と、b) 日本語で言うところの「間違い」だとし、通訳の誤差は、この a)、つまり、”degree of error”ではないかとする(西山, 1979)、同時通訳者の草分けである西山千の意見に端を発している。

検証に際しては、抽出した構成素を、予め存在する語彙上の「遊び」(free of play)、往々にして見過ごされるだろう認知上の許容値内(within tolerance)、大勢に影響はないが文字に落とす過程で、明らかに誤訳として訂正されるだろう許容値外または逸脱(deviation)に分ける。また、一般的には知られていない用語の訳出が正しく行われているか、前記とは個別の検証を行う。

検証対象である素材は、連日定期的に日英同時通訳が行われている官房長官記者会見のYouTube 動画の日本語原文と、政府広報オンラインの日英同時通訳をそれぞれ文字起こしして用いる。母集団の数は未定だが、期間は3か月間であり、定量分析として意味のある抽出件数を目指す。誤訳の検証分析を行った先行研究として、ベニース事件を素材にした法廷通訳のコーパス分析(中村, 2011)や、誤訳しやすい長文を用いて日中同時通訳を分析した研究(龐焱, 2015)があるが、これらは多数の素材の定量的分析ではない点で本研究は新規である。

#### 【参考文献】

- 朝日新聞編集部(2016)「法廷通訳 裁判所が鑑定 インドネシア語で誤訳疑い」『朝日新聞』(2016年10月26日)
- 小松達也(2005)『通訳の技術』 研究社
- 鳥飼久美子(2004)『歴史をかえた誤訳』 新潮文庫: 24-34, 36-37.
- 中村幸子(2011)「ベニース事件の通訳を巡る言語学的分析: 談話標識を中心に」『金城学院大学論集』第8号, 210-215.
- 西山千(1979)『通訳術と私』 プレジデント社: 179-184.
- 龐焱(2015)「日中同時通訳における誤訳長文の特徴について」『神戸女学院大学論集』第62号 pp.97-113.

第2日(9月8日) B会場(K302) 10:00 – 10:30

B-7 司会: 飯田奈美子

オーセンティックマテリアルを用いた 3 言語(英語・韓国語・中国語) 翻訳指導実践報告: 日本人学生と留学生による三原庭園ホームページ共同翻訳の取り組み

辰己 明子(広島大学)、新里 喜宣(長崎外国語大学)、呉 青青(長崎外国語大学)、金子 奈央(元長崎外国語大学)

本授業実践報告では、長崎外国語大学の授業で実施した三原庭園ホームページ(以下、三原庭園 HP)を 3 言語(英語・韓国語・中国語)での翻訳の取り組みと、三原庭園 HP 翻訳を通して学生に見られた気づきを報告する。

2023 年度秋学期に、長崎外国語大学の授業にて、オーセンティックマテリアルとして三原庭園 HP (<https://www.miharagarden.com> 参照)を英語・韓国語・中国語に翻訳する取り組みを行った。本授業実践報告において、オーセンティックマテリアルとは、外国語学習用として意図的に作られた教材ではなく、現実に存在する事物をテキストや音声教材としたもの(白畑・富田・村野井・若林, p. 24)を指す。長崎県長崎市にある三原庭園は、世界的庭園デザイナー石原和幸氏によりプロデュースされた庭園である。石原氏より三原庭園 HP 翻訳の依頼を受け、長崎を訪れる外国人観光客層を踏まえ、HP の英語、韓国語、中国語への翻訳を長崎外国語大学の各言語授業内にて実施した。長崎外国語大学で学ぶ留学生も参加し、日本人学生との共同翻訳を行った。英語は、履修者 16 名の学生(日本人 10 名、英語圏留学生 6 名)、中国語は履修者 16 名の学生(日本人 6 名、中国人留学生 10 名)、韓国語(日本人 19 名、韓国人留学生 9 名)の学生により HP 翻訳を行った。文化的要素も含め三原庭園 HP 全体的内容を理解した上で、各言語での授業内にて翻訳が進められた。以下は、各言語による取り組みとなる。

英語授業では、日本人学生と英語圏留学生のペア・グループでの共同翻訳により進めた。はじめに、日本人学生が担当部分の英語への翻訳を行い、留学生が翻訳内容を確認し、日本人学生と留学生が議論しながら翻訳の修正を進め、最後は全員で全翻訳を確認し完成させた。韓国語では、日本人と留学生の混合グループをつくり、日本人学生が韓国語への翻訳を、同グループの留学生が校正を担当した。その後、提出された翻訳文を他グループの留学生と担当教員が再検討し、完成稿を決定した。中国語授業では、事前に、日本人学生と中国人留学生それぞれが担当している部分を中国語に翻訳したものを、授業内ではグループに分かれ議論を通して翻訳修正を行い、教師による翻訳例をもとに、中国語での翻訳を日本人学生と留学生が共同して完成させた。各言語による授業内での三原庭園 HP 翻訳の取り組みを通して学生に見られた気づきの傾向として、1) 翻訳する際の言語間の違い、2) 読み手を意識した翻訳修正の難しさが挙げられる。

#### 【引用文献】

白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則. (2019). *英語教育用語辞典*. 大修館書店.  
三原庭園 (n.d.). *ようこそ三原庭園*. 三原庭園. <https://www.miharagarden.com>.

第2日(9月8日) B会場(K302) 10:40 – 11:10

B-8 司会: 飯田奈美子

翻訳教育の実践から見たベトナム語-日本語翻訳の誤訳:誤訳のパターンと修正提案を中心に  
NGUYEN Thanh Tam (愛知県立大学 非常勤講師)

日本語・ベトナム語間の翻訳における誤訳についての先行研究は少なく、この分野の体系的な研究の必要性が高まっている。特に、機械翻訳やAI翻訳ツールが広く普及している現在において、学生はこれらのツールを日常的に使用しているが、依然として誤訳のリスクが伴う。誤訳のリスクを軽減するためには、学生が誤訳のメカニズムと修正方法を理解することが不可欠である。

本研究は、ホーチミン市オープン大学の翻訳授業において、ベトナム語から日本語への翻訳における誤訳のパターンとその原因を分析し、学生に効果的に提示し、修正提案を行う実践的な方法を検討することを目的としている。これにより、翻訳教育における誤訳の特徴を明らかにし、学生の翻訳スキル向上を支援することを目指す。研究方法として、まず、翻訳授業において日本語能力が初中級レベル(JLPT N3~N2相当)の三年生が提出した翻訳課題の回答を収集・分析した。その結果、特定のパターンに従う誤訳が頻繁に発生することが確認された。具体的には、文法構造の違いに起因する誤訳、語彙選択のミス、文化的背景の理解不足から生じる誤訳が主要なカテゴリとして特定された。次に、これらの誤訳を効果的に指摘し、学生に提示する方法を検討した。具体的には、フィードバックセッションを実施し、学生の誤訳を例示し、その原因と修正方法を詳細に解説した。また、学生が自身の誤訳を客観的に評価し、修正の必要性を理解するために、学生に機械翻訳ツール(Google 翻訳や DeepL)の出力と自身の翻訳を比較し、違いを認識する課題を与えた。研究の結果として、ベトナム語から日本語への翻訳における誤訳のパターンを明確にし、それらの誤訳を効果的に指摘・修正するための実践的な手法を確立することができた。今後の研究では、さらに多様なテキストや異なる翻訳者を対象に調査を拡大し、翻訳教育の質を向上させるためのより包括的なアプローチを探求する予定である。

第2日(9月8日) B会場(K302) 11:20 – 11:50

B-9 司会: 飯田奈美子

継承語話者など多様な背景を持つ受講生を対象とした通訳・翻訳教育の可能性  
朱 藹琳(愛知大学)

本発表では、愛知大学現代中国学部における多様な背景を持つ受講生を対象とする授業に通訳・翻訳を取り入れた実践を報告し、その可能性を検討する。

愛知大学現代中国学部では、日本人など多国籍の中国語学習者以外に、中国にルーツのある学生(中国語継承語話者)、中国語圏留学生(中国語母語話者)も多数在籍している。こうした多様な背景を持つ全学部の学生を対象とする「外国書講読」という演習形式の授業において、2023年度から、翻訳のテキスト分析を取り入れた実践を試みた。授業では、日本語の原作と中国語翻訳版を比較して輪読し、中国語と日本語の読解力を鍛えて言語自体の特徴の違いを気づかせると同時に、翻訳は様々な社会的・文化的要素に影響される複雑な行為であることを認識させることができた。2024年度は学生の要望に応じて視聴覚翻訳も取り入れ、セリフと字幕を比較し、実際に自分で字幕を翻訳することで、さらに翻訳の複雑性と多様性を思索する機会を与えている。

また、中国にルーツのある学生(中国語継承語話者)を対象とする授業で通訳訓練を取り入れる実践を試みた。同学部は中国にルーツのある学生数の増加にともない、中国語を初級から学ぶ学生と区別して「Sクラス」を編成している。2023年度から、週5コマの必修中国語科目に、春学期1コマ、秋学期2コマで通訳訓練を取り入れた。「Sクラス」の学生は、家庭の事情で日本に移住する時期が異なるため、中国語能力も日本語能力もばらつきが大きい。よって授業では、外国語を学ぶための通訳教育と、通訳者養成に向けた通訳訓練の間に位置付けて通訳を練習している。一年間の実践を通じて、学生が提出した振り返りレポートやコメントペーパー、および産出した訳文や通訳の姿勢から、中国語と日本語の理解力と表現力が強化し、語彙と文化に関する知識が増えた効果が見られた。また、学生が積極的に苦手意識を持った言語を使用するようになったり、自分の弱みに向き合って自主的に学習したりする様子が見られた。通訳実践を通じて両言語・文化を行き来する中で、自身を省みることを促し、複数の文化・社会間に立つ学生が自身のアイデンティティに向き合う機会を与え、アイデンティティの構築に役立つ可能性が示唆された。

第2日(9月8日) B会場(K302) 13:00 – 13:30

B-10 司会: 長沼美香子

産学連携による通訳翻訳修士(MTI)の育成モデルと運用メカニズム  
張 晶 (北京大学)

グローバル化の加速と国際交流の増加に伴い、通訳翻訳人材の育成がますます重要なテーマとなっている。その中で、産学連携は、高度な専門知識を持つ通訳翻訳人材を育成するための重要な手段として注目されてきたが、実際には多くの問題点があり、思ったほど連携が順調に進まない場合が多い。

本文では、まず育成目標における教育機関と企業間の食い違い、育成過程における監督管理メカニズムの欠如、教員の資質能力及び企業側指導教官の不足という3つの問題点を指摘する。その上で、これまでの「二つの主体」による協働教育に代わり、「目標を一致させ、責務を共に担い、資源を共有する」という「三つの主体」による産学共同人材育成モデルを提案する。このモデルでは、通訳翻訳人材の育成と市場のニーズを繋ぐための現実的なルートが模索され、「1(訳す力) + N(言語サービス業の上・下流業務に対する実践)」という新しい教育理念が提案された。

この理念に基づき、北京大学は自身の強みに照らしながら、「1」を「人文社会系図書を訳す能力」に、「N」を「翻訳プロジェクトの管理、校正業務の実践」と定めた。そして、著作権エージェントと出版社との間に協力関係を築き、共に授業を行い、共に教材を作成し、質の高い翻訳作品を迅速に世に送り出すという連携の好循環を生み出した。

統計によると、2023年までに産学連携で出版した翻訳作品は72冊に達し、一部はヒット作となり、大きな反響を呼んだことがわかった。また、卒業生と就職先の上司を対象としたアンケート調査によると、全体として卒業生が当該育成モデルに満足しており、上司も当該卒業生を高く評価していることが判明した。つまり、この育成モデルは優れた翻訳作品の産出・出版だけでなく、学生の就職にも有利に働いたのである。

この育成モデルは、通訳翻訳教育を実際の通訳翻訳市場のニーズとマッチングさせ、人材育成の質的向上を果たしたことで評価された。

## 第2日(9月8日) B会場(K302) 13:40 – 14:10

## B-11 司会: 長沼美香子

## 学習動機に応じた通訳授業の試み

楊 潔氷(河南理工大学)

本研究では、2023年9月12日～12月26日の間に週一の頻度で、学習動機に応じた通訳授業を計15回実施した。受講者は日本語学部の四年生(29名)であった。授業開始前に進路調査を行い、日本語を用いて受験勉強や就職活動をしている学生を「学習動機あり組」(11名)とし、日本語に関連しない進路を選んだ学生を「学習動機なし組」(18名)とした。「学習動機なし組」の学生には、通訳演習の時間に他分野の内容を学んでもいいと許可した。通訳授業の詳細を表1に示す。

表1 通訳授業の詳細

授業の回数	内容
1回目	オリエンテーション、テスト、講義(通訳理論と訓練方法に関する基礎知識)
第2～3回、 8回目、11回目	講義、基礎訓練(単語クイック・レスポンス、文章穴埋め聴解練習、 リピーティング→逐次通訳→シャドーイング、ノートテキング→翻訳)
第4～7、9～ 10、12～14回	基礎訓練、通訳演習(通訳ロールプレイ、スピーチ→通訳、1人ずつ逐次通訳)、 フィードバック
15回目	テスト(予告なし)、復習と質疑応答

全国通訳・翻訳資格試験(CATTI)の日本語通訳総合能力試験を参考にし、最初と最後の授業では文と段落の聴訳テスト(原文を聞き翻訳する問題)を実施した。文の聴訳テストは12点満点で、段落の聴訳テストは6点満点であった。4名の学生のデータに不備があったため、分析対象から除外した。残りの25名のテスト結果を表2と表3に示す。

表2 各グループにおける文聴訳テストの平均得点と標準偏差

日本語学習動機あり組(9名)				日本語学習動機なし組(16名)			
日本語文の聴訳問題		中国語文の聴訳問題		日本語文の聴訳問題		中国語文の聴訳問題	
訓練前	訓練後	訓練前	訓練後	訓練前	訓練後	訓練前	訓練後
6.17 (2.90)	8.94 (1.99)	4.72 (1.70)	6.56 (1.29)	4.28 (3.08)	5.53 (2.52)	4.16 (1.83)	4.88 (1.55)

表3 各グループにおける段落聴訳テストの平均得点と標準偏差

日本語学習動機あり組(9名)				日本語学習動機なし組(16名)			
日本語段落の聴訳問題		中国語段落の聴訳問題		日本語段落の聴訳問題		中国語段落の聴訳問題	
訓練前	訓練後	訓練前	訓練後	訓練前	訓練後	訓練前	訓練後
3.33 (1.25)	5.67 (0.50)	1.50 (0.75)	3.89 (0.74)	2.34 (1.80)	4.63 (1.82)	1.44 (1.00)	3.00 (1.63)

訓練前後の成績をt検定で分析した結果、日本語学習動機あり組では、翻訳の方向性にかかわらず、文と段落の聴訳成績は有意差があった([日]文: $t(8)=4.37, p=.002, r=.84$ ;[中]文: $t(8)=4.16, p=.003, r=.83$ ;[日]段落: $t(8)=4.80, p=.001, r=.86$ ;[中]段落: $t(8)=6.80, p<.001, r=.92$ )。日本語学習動機なし組では、日本語文の聴訳成績は有意傾向がみられた( $t(15)=1.97, p=.068, r=.45$ )が、中国語文の聴訳成績は有意差がみられなかった( $t(15)=1.60, p=.131, r=.38$ )。他方、段落の聴訳成績は翻訳の方向性にかかわらず、有意差があった([日]: $t(15)=5.24, p<.001, r=.81$ ;[中]: $t(15)=4.35, p=.001, r=.75$ )。

学習動機の有無にかかわらず、段落の聴訳成績が有意に伸びたことから、文脈情報による理解の促進効果がみられた。中国語文と段落の聴訳成績が低かったことから、日本語での産出訓練を多めに行う必要があることが分かった。今後、CATTIの通訳実務試験も参考にテストの問題を増やし、訓練方法や学習動機が通訳技能に与える影響を実験室で厳密に検討する。

第2日(9月8日) B会場(K302) 14:20 – 14:50

B-12 司会: 長沼美香子

日本における法廷通訳問題未解決の根本要因を探る:ポストンの法廷通訳人取材に基づく「力関係」と「専門職化」の分析

田村 智子(国際基督教大学)

日本における法廷通訳資格認定制度の必要性はバブルピーク時の1987年から既に国会で指摘されていたが、法務大臣の可及的速やかに検討するという答弁とは裏腹にその後10年何の進展もなく(大森, 1998)、2008年の裁判員制度導入前後こそ、司法通訳研究の数も増え、制度の欠如を問題視した日本弁護士連合会から立法化への意見書(2013)が出されるなど、一時期関心は高まったものの、現場の通訳人が抱える葛藤(水野, 津田, 2016)への対策も先送りのまま、昨今は通訳人の減少など問題の未解決状態が続く。常に比較の対象とされてきたのは米国の1978年連邦裁判所法廷通訳人法であるが、法制化後半世紀を経て米国での法廷通訳の専門性の確立はいかなる形でもたらされてきたのか。本発表では、通訳学で援用されている専門職化の理論(Grbič, 2015)と通訳行為に伴う3種類の力関係(Mason, 2015)を枠組みとし、2024年3月に米国ボストン市で連邦及び州裁判所の法廷通訳人を対象に行った1週間の密着取材に基づき、法廷通訳の専門職化に必要な要因の分析を試みる。Mason(2015)が指摘する力関係は米国も日本も基本的には同じはずである。また1978年の連邦法成立後、各州で類似の制度が設けられ現在に至るが、少数言語に関する問題など課題が無いわけでは決してない。マサチューセッツ州でも年間90,000件以上、113語にわたる通訳業務を約180名の常勤及び非常勤の通訳人が担う。ボストン市裁判所、サフォーク郡高等裁判所、及び連邦地方裁判所において、分刻みで法廷から法廷へ目まぐるしく移動し業務を担う、特に常勤通訳人らの職務遂行の観察及び通訳人詰所等での取材から得られた情報を我が国の現状と比較しつつ、制度確立に不可欠な要因を分析する。

#### 【引用文献】

Grbič, N. (2015). Profession. In F. Pöchhacker (Ed.), *Routledge encyclopedia of interpreting studies* (pp. 321–326). Routledge.

Mason, I. (2015). Power. In F. Pöchhacker (Ed.), *Routledge encyclopedia of interpreting studies* (pp. 314–316). Routledge.

水野かほる, 津田守(編). (2016). 裁判員裁判時代の法廷通訳人. 大阪大学出版会

日本弁護士連合会. (2013年7月18日). 法廷通訳についての立法提案に関する意見書.

大森礼子. (1998). 適正通訳の保証と国の姿勢: 国政の視点. 渡辺修・長尾ひろみ(編), 外国人  
と刑事手続き: 適正な通訳のために (pp. 297–313). 成文堂.

第2日(9月8日) B会場(K302) 15:00 – 15:30

B-13 司会: 石原知英

日本の捜査通訳制度の問題に関するケーススタディ:フィリピン(タガログ)語誤訳事件を事例として  
道上 史絵(立命館大学)、村上 智里(関西大学)、吉田 理加(愛知県立大学)

本研究は司法通訳、特に警察の捜査通訳について権利保障の観点から分析することを目的としている。しかし現在日本では、捜査通訳に関して情報がほぼ開示されていない。よって捜査通訳を研究対象とするには事例収集が主な方法となる。本発表では、X 地方裁判所において2024年3月に無罪判決が確定した覚醒剤取締法違反事件を事例として取り上げる。発表者らは同年5月に元被告人と弁護人、弁護側通訳人に対しインタビューを行い、本事案の詳細な情報を得た。同インタビュー内容と判決要旨から問題の背景を明らかにし、現在の日本における捜査通訳制度の課題を考察する。

まず事案の概要を述べる。元被告人は覚醒剤譲渡、使用容疑により2021年に逮捕され、通訳人を介した取調べを経て、起訴された。公判で争点となったのは取調べで行われたフィリピン(タガログ)語から日本語への証拠の翻訳(覚醒剤譲渡のやり取りと思われる携帯電話のメッセージ)の中立性であった。男性を指す人称代名詞が元被告人(女性)の名前で訳出されていることに弁護人が気づき、誤訳を主張した。最終的に翻訳の問題が認められ、証拠の信用性が疑われ、無罪が確定した。上記の翻訳を行った通訳人は、携帯電話所有者の供述に基づき翻訳を行ったと述べた。

本事案から、現行の日本の捜査通訳制度が抱える問題は大きく二つあると言える。一点目は通訳人の質の問題である。上記の誤訳は当該通訳人が司法通訳の専門教育を受けていれば防ぐことができたと考えられる。十分な通訳人養成制度がないまま、専門教育を受けずとも司法手続きに関わることができる現行制度は人権保障の点から大いに問題がある。二点目は現行制度が通訳内容の正確さを担保する構造となっていないことである。現行制度では通訳人が行った通訳翻訳に間違いがないことが前提とされ、通訳人の情報も開示されず、誰がどのように業務を行ったのか不明である。捜査段階の守秘体質が問題の根底にあると考えられるが、このような構造下では誤訳を完全に防ぐことは困難である。安全確保の観点から通訳人情報の開示ができないとしても、取調べを全て録音する、通訳翻訳内容を第三者が確認するなどの対策は早急に導入すべきだろう。

本発表で取り上げたのは一例であるが、既述の通り捜査段階の通訳過程が不透明である現状においては、事例を収集し、問題を明らかにしていくしかない。今後も同様の調査を継続していく必要がある。

第1日(9月7日) C会場(K402) 13:30 – 14:40

C-1 C-2

通訳者・翻訳者の役割・アイデンティティ・スコポス・力関係・倫理に関する再考:日本人大リーガー専属通訳者問題をきっかけに

田村 智子(国際基督教大学)、板谷 初子(北海道武蔵女子大学)、北代 美和子(翻訳家)、新崎 隆子(NHKグローバルメディアサービス会議・放送通訳者)、鶴田 知佳子(東京外国語大学)

2024年3月に明るみにでた米国大リーグ日本人選手専属通訳者の問題は、日頃「通訳」という概念とは殆どかわりを持つことはないであろう人々の間にも「通訳」及び「通訳者」に対する様々な議論を醸したが、これは同時に通訳翻訳学の視点から今一度、多様化する業務内容の現場におかれている通訳者・翻訳者の「役割」「アイデンティティ」「スコポス」「力関係」「倫理」に関しての再考を求められていると言える。また、これからの通訳翻訳教育における道しるべを示す意味でも、今回の問題をきっかけとする通訳者及び翻訳者の役割・アイデンティティ・スコポス・力関係・倫理を再訪し分析・考察を行うことは喫緊の課題であるとの認識に基づき、以下のような議論に焦点をあてたパネルトークを行う。業務が多様化する現場では、通訳者・翻訳者は自身が描く「役割」とクライアントからの期待や要望という現実との狭間で「agent(自身で物事を判断する主体)」として常に様々な判断を迫られる。対人援助等のみならず社内通訳翻訳業務等でも本来の業務を逸脱した任務や要望への対処は日々起きる。その際超えるべきでない境界線がもしあるとすればその判断の基準は何か。また通訳者・翻訳者が、雇用主であり報酬の支払者でもあるクライアントの「agent(代理人)」であるとするれば、通訳者・翻訳者の職務及び責任の範囲はいかなるものになり、通訳者・翻訳者は自身の「アイデンティティ」を業務の「スコポス」遂行の過程でどのように維持するのか。さらには、通訳・翻訳行為に付随する力関係、例えば Mason (2015) は対人通訳に付随する力関係には「言語間の力関係」「通訳者のクライアントに対する言語的優位性」「制度的力関係」があるとしたが、これらの力関係は、現場における通訳者・翻訳者の「agency(自身で物事を判断する主体性)」にいかなる影響を及ぼしているのか。その気になれば「言語的優位性」を自身の利益のために最大限利用することがたやすい立場にある通訳者・翻訳者が、クライアントからの信頼を得なければ仕事が獲得できないという現実を見据えたときに、通訳者・翻訳者の倫理規定とはいったい誰が誰のために誰に課すものであるのかを再考する必要があるだろう。

#### 【参考文献】

Mason, I. (2015). Power. In F. Pöchhacker (Ed.), *Routledge encyclopedia of interpreting studies* (pp. 314–316). Routledge.

第1日(9月7日) C会場(K402) 14:50 – 16:00

C-3 C-4

## 2つの東京オリンピックの間の通訳史

木村 護郎(上智大学)、高橋 絹子(関西大学)、内藤 稔(東京外国語大学)、西畑 香里(東京外国語大学)、岩崎 修子(関西大学M)

本プロジェクトでは、1964年と2021年に東京で開催された2つのオリンピックの間の期間における社会一般の「通訳」「通訳者」に対するイメージやその捉え方の変化の調査を実施している。この期間にイメージや捉え方が変遷を遂げていることは経験や感覚に基づいて感じられることはあったとしても、学術的な調査は実施されていない。従って今年度は出版物を対象に「通訳」「通訳者」に関する言及を中心に調査を行った。

まず、新聞について、2つのオリンピックに至る過程で通訳がどのように報じられているかを、それぞれ先立つ4年前のオリンピックのときから、『朝日』『読売』両誌における記事を取りあげて対比した。1964年は、いわば手探りで対応を図ったのに対して、2021年は、1回めをかなり意識しながら対応を進めた様子が見えられた。またこの間に、社会の国際化が進展したなかで報道における通訳の位置づけがどのように変化したかを考察した。

また、2つの時期における一般紙での報道を広く対比的にみた新聞に対して、より対象を絞った形で経年変化に焦点をあてるべく、英語学習関連の雑誌の調査を行った。具体的には、『英語青年』『英語教育』『CNN ENGLISH EXPRESS』『多聴多読マガジン』『English Journal』の5誌の中で、通訳または通訳者についてどれだけ取り上げられているか、またその取り上げられ方にどのような変遷が見られるかについて調査した。

5誌の中には、既に終刊となっているものもあり、本調査では、2024年5月現在もアクセスが可能なウェブサイトに掲載されているものを対象とし、目次において、「通訳」「通訳者」という言葉がどれだけ使われているかをカウントした。発表では、各誌の調査の結果にどのような傾向が見られたか、また同じ目次上に見られた「翻訳」「翻訳者」に関する記述との比較についても言及する。

さらに書籍においても同様の調査を行った。職業紹介の「なるには BOOKS」は、1975年発行の『通訳になるには』、『通訳・通訳ガイドになるには』(1988年、2001年)、『通訳者・通訳ガイドになるには』(2019年)と、これまで4種類が出版されている。時代の異なる同じ目的の4冊の題名及び目次における「通訳者」の概念、および記述の中での通訳者への認識の変化について探った。

これらの結果に基づき、通訳者に対する社会のイメージや捉え方がどのように変化しているのか、「通訳者」「通訳」の言及の回数やその表現方法の変化など具体的に報告する。

## 【参考文献】

- 『通訳になるには』(1975). ぺりかん社. 栗田晃穂. ぺりかん社.  
 『通訳・通訳ガイドになるには』(1988). エイアイケイ教育情報部編. ぺりかん社.  
 『通訳・通訳ガイドになるには』(2001). エイアイケイ教育情報部編. ぺりかん社.  
 『通訳者・通訳ガイドになるには』(2019). 鐘田 浩章. ぺりかん社.

第1日(9月7日) C会場(K402) 16:10 – 16:40

C-5 司会: 北代美和子

原抱一庵のユゴー受容:『レ・ミゼラブル』の翻訳を中心に  
劉丹(神戸大学)

日本におけるユゴーの受容は、明治期に始まり、現在まで140年以上続いている。詩人、小説家、政治家、思想家など多面的な顔をもつユゴーは、日本では何よりも『レ・ミゼラブル』の著者として知られている。実際に本書は、明治期から現在まで日本でのユゴー受容の中心をなす作品であり、このことは、本書がミュージカル、漫画、アニメ、ドラマ、映画など様々な翻案の形で受容されてきたことにも示されている。

しかし『レ・ミゼラブル』は、明治期から現在まで終始同じような仕方で受容されてきたわけではない。現代では主として作品の文学性や娯楽性が評価されているが、明治期には日本の政治・社会と密接に関わる思想的側面に注目が向けられていた。本報告が焦点を当てるのも、この明治期の受容の様態である。

明治期のユゴー受容に関する研究の多くは、ユゴーの名を広く知らしめた「翻訳王」森田思軒(1861-1897)や、『レ・ミゼラブル』の翻案作品『噫無情』で人気を博した黒岩涙香(1862-1920)の仕事に関心を寄せてきた。これに対し、当時の日本(さらに東アジア)におけるユゴー受容において大きな役割を果たしたもう一人の文士、原抱一庵(1866-1904)の業績は、なお十分な分析の対象となっていない。原による『レ・ミゼラブル』の抄訳の一部は、明治初期に大衆的な人気を得ただけでなく、中国や朝鮮で重訳もされた。加えて原自身もユゴーの影響のもと、日本社会の実相を描き出す創作活動に取り組み、高い評価を得た。明治期のユゴー受容は、原のこうした業績を踏まえて再検討される必要がある。

以上の関心のもと本発表では、原による『レ・ミゼラブル』の抄訳(「ジャンバルジャン」、「ミリエル僧正」、「ABC 組合」、「暁鐘」など)とその底本(英訳本)を手がかりに、原の翻訳方法を分析するとともに、パラテキストの解説を通じてその翻訳意図を探ることを試みる。これらの作業を通して、原によるユゴー解釈のあり方、原における『レ・ミゼラブル』の受容と変容の様態を明らかにし、またこのことが当時の日本社会のあり方とどのように関わっていたかを考察したい。

第1日(9月7日) C会場(K402) 16:50-17:20

C-6 司会: 北代美和子

雑誌『翻譯時報』(明治33-34年)とその翻訳言説  
齊藤 美野(順天堂大学)、佐藤 美希(札幌大学)

筆者らは近代日本における翻訳の社会文化的機能を理論化する研究プロジェクトに取り組んでおり、本発表はその一部である。同プロジェクトでは、近代化政策のもとで西洋語からの翻訳が盛んに行われた明治期(1868-1912)に生み出された「翻訳言説」の分析を、当時の社会文化的コンテキストと関連付けながら行っている。翻訳言説とは、「翻訳行為とは何か、何のために、何にどのような影響を及ぼしうると考えられていたのか」が直接・間接的に読み取れる文章である(齊藤・佐藤, 2024, p. 61)。訳出方法や翻訳の良し悪しを直接的に述べるいわゆる「翻訳論」(柳父・水野・長沼, 2010)も含まれるが、それ以外の間接的なパラテキストなども重要な翻訳言説である。

本発表は、明治33(1900)年10月から翌年3月までの短期間に発行された雑誌『翻譯時報』を分析対象とし、同誌発行時の社会文化的コンテキストを踏まえたうえで、記事の分析結果を示すものである。英日・日英対訳で記事を提供した『翻譯時報』全11号の総記事185件中、翻訳言説が見受けられる箇所を精読のうえ、内容に即して言説の特徴を示す。

『翻譯時報』が発行された明治後半は、英語に関わる新聞・雑誌の出版が増加すると同時に、中等・高等教育における英語の研究体制が確立し始め、英語で書かれたテキストの受容が拡大していた時期であり、翻訳への関心が高まっていた。同誌は英語の学習と熟達のために「一般読者に有益なる材料を供せむ」(第1号, p. 2)ことを狙ってすべて英語と日本語の対訳であることが大きな特徴であり、それが雑誌名に「翻譯」と入っている所以である。記事の内容は「論評」「法律」「文苑」「読者寄書欄」「時事」「英作文」など多様であり、さらに投稿欄も設けていたことから、英語で複数のジャンルの記事を読む機会とともに、英語で文章を書く機会も読者に提供していたことがわかる。このような同誌の形態の解説と記事の分析結果をもとに、『翻譯時報』という雑誌に見られる当時の翻訳に関わる思考や翻訳に期待されていた社会的役割を論じたい。

#### 【参考文献】

齊藤美野・佐藤美希(2024)「雑誌『太陽』における明治期の翻訳言説」『通訳翻訳研究』23: 61-81.  
柳父章・水野的・長沼美香子(編)(2010)『日本の翻訳論:アンソロジーと解題』法政大学出版局。

第2日(9月8日) C 会場(K402) 10:00 – 11:10

C-7 C-8

学会誌の現在・過去・未来:編集サイドと投稿者・読者の対話を育むミニシンポジウム  
『通訳翻訳研究』編集関係者有志の会(長沼美香子・藤濤文子・石塚浩之・大久保友博ほか)

日本通訳翻訳学会の編集委員会では現在、唯一の学会誌である『通訳翻訳研究』第 24 号の投稿を受け付けています。本ミニシンポジウムの企画は、一区切りともいえる第 25 号を目前に控えて、これまで編集業務にかかわった側と、投稿者や読者あるいは匿名査読者として本誌を支えてくださった会員との間の対話を育む試みです。

本学会の大きな特徴の一つは多様性です。研究者・学生・実務家という会員構成の豊かさ、通訳研究・翻訳研究・通訳教育・翻訳教育に加え、近年では視聴覚翻訳や機械翻訳などの新たな分野の台頭とその方法論が多岐にわたること、そして扱う言語が多言語であること、さらに原稿の種別に「その他」というカテゴリーがあることなどが、投稿内容の多様性につながり学会誌の魅力となる一方で、編集委員会では査読者の選定などで困難に直面することもあります。

このミニシンポジウムは基本的に二部構成とします。

第 1 部では、まず編集長経験者からの回顧(過去)を共有します。次に、現在の編集委員会から現状を踏まえた提言(現在)を行います。

第 2 部では、会場の参加者からの編集サイドに対する質問・意見・コメントを中心に、より良い学会誌の今後(未来)を共に考える場とします。

学会誌は学会活動の成果を集約する機能も備えています。『通訳研究』として創刊された本誌は、途中からは Web ジャーナルとも伴走しながら、『通訳翻訳研究』と改称し少しずつその役割を変えて学会の発展を支えてきました。そして今こそ、およそ四半世紀におよぶ伝統を礎としつつ、これからの学会誌の役割や学会そのもののあり方を含めた幅広い話題について、自由に意見交換ができる場が必要ではないかと考えています。

なお年次大会に先立ち学会 ML でも事前アンケートを配布して、ご質問・意見・コメントやその他のご提案などを募りたいと思います(下記の URL もしくは QR コードからアクセス)が、当日の会場でのご発言も大いに歓迎します。わくわくするような学会誌の誌面作りにあなたも参加してみませんか。

■事前アンケート(2024 年 8 月 18 日締切)にぜひご協力ください。

<https://forms.gle/AhxgTUPeNhWFADhE7>



第2日(9月8日) C会場(K402) 11:20 – 11:50

C-9 司会: 石原知英

通訳案内士の通訳に対する意識—「通訳者」のとらえられ方  
岩崎 修子(関西大学 M)、高橋 絹子(関西大学)

本研究は、通訳案内士(以下、通訳ガイド)の「通訳者」という職業に対する志向を調査し、通訳(者)がどのようにとらえられているのかということを探る目的で実施するものである。通訳ガイドの国家資格の第2次口述試験には通訳を実践する課題が含まれている。つまり、案内業務であっても、通訳ができる能力もないと通訳ガイド試験には合格することができない。しかし通訳ガイドの中には、通訳ができる能力があり、しかも収入の点では通訳の方が恵まれているにも関わらず、通訳者にはならず、通訳ガイドとして業務を続けているケースも多い。これには当然のことながら、個人の職業に対する嗜好の問題もある。しかし、通訳スキルを身に付け通訳業務で使用できる能力を保有しながらも、なぜあえて通訳者となることを選択せずに、「通訳ガイド」を選択するのであろうか。その理由を探ることで、「通訳者」という職業がどのようにとらえられているのかということが明らかになると考えた。

この目的で、現役の通訳ガイドに対して、構造化インタビューを実施した。インタビューでは、ガイドになった経緯や通訳訓練の経験をたずねてから、通訳に対する志向となぜ通訳者という職業を選択しないのかという点について質問を行った。

その結果、通訳という業務に対して、「高度な英語力を必要とする」や「敷居(ハードル)が高い」と考えられていることが、判明した。その一方で通訳ガイド業務については、「人と接することができる職業である」や「コミュニケーションを取りながら仕事をするができる」という。しかしこれは通訳者も同様であろう。業務中に行うことがある通訳業務に関しては、「通訳者」とは異なるアプローチで行われるというが、通訳ガイド独自のアプローチかと言えば、必ずしもそのように言い切れない点もあった。

本調査の結果から、「通訳ガイド」が「通訳者」という職業をどのようにとらえているかということには、ある程度の誤解もあるのではないかと考えられる。本調査により、よく対比されながらも、一般的にはその差があまり正しく知られておらず、誤解されていることも多い2つの職業の違いと類似点を、より明確にすることも可能となるであろう。

第2日(9月8日) C会場(K402) 13:00 – 14:10

C-10 C-11

通訳コミュニケーションプロジェクト報告:通訳研究の可能性

高橋 絹子(関西大学)、石塚 浩之(広島修道大学)、飯田 奈美子(立命館大学)、大井川 朋彦(日本大学)

本プロジェクトは、学際研究としての通訳研究の可能性を考える目的で設立された。プロジェクトでは、それぞれの学問的枠組みを利用した通訳研究に関して知見を深めることができた。本発表では、認知科学、社会学、音声学に基づく通訳研究の可能性を報告する。

従来、通訳翻訳の認知的研究の多くは、通訳者・翻訳者のみの内面に注目してきたが、近年、原発話者や通訳翻訳の受け手などを含みコミュニケーションの場面をとらえ、社会的認知に注目する研究も現れている(e.g. Hokkanen, 2020)。「言語コミュニケーションの概念-意味相関モデル」(船山, 2020)も、この流れに沿って通訳者の認知を扱うことのできる枠組みである。本発表では、同時通訳記録に現れる追加的指示詞(原発話に対応表現のない指示詞の訳出)を手がかりに、同時通訳者による対人認知を、タイミング、情報源、働きの観点から事例分析する。また、機械翻訳による訳出例との比較から、コミュニケーションの参与者としての人間の認知について考察する。

社会学では、他者とのかわりにおいてなされる行為を社会的行為と呼び、社会的行為の観察から社会がどのように構築されているか考えられている。社会学エスノメソドロジー・会話分析において、特定の位置(いま)、特定の組み立ての振る舞い(それ)がなされることで、通訳者の特定の行為が認識可能になることが分析できる。事例として、通訳者が聞き手時に行為の受け手にならないために「通訳のホームポジション」という体制を取る。これによって、通訳者は行為の受け手にはならないが、話し手が求める反応を聞き手から引き出すことができないとき、通訳者が行為の受け手となり、反応を引き出そうとしていることを説明していく。

音声学の観点からも研究が実施されている。これまで、通訳者における子音や母音の聞き取りを中心に音声実験を実施してきた。その結果、通訳者の英語の音声知覚は英語母語話者とはまったく同じというわけではないということが判明した。結果に個人差が見られるため、参加者にインタビューを実施し、その詳細を分析し、結果を報告する。

#### 【参考文献】

船山仲他 (2020)『自然言語をめぐる秩序 言語化と概念化』(開拓社)

Hokkanen, S. (2020). Social representations theory: An approach to studying translators' socio-cognitive processes. *Linguistica Antverpiensia, New Series: Themes in Translation Studies*, 19, 94–110.

第2日(9月8日) C会場(K402) 14:20 – 15:30

C-12 C-13 司会: 大久保友博

相互行為管理(インタラクション・マネジメント):通訳ブースの「保護」なしの個人的かつ近接的な通訳  
Heather Glass (University of Melbourne M)

(ワークショップ形式を想定)

一般的に、欧米ではプロ通訳の発祥はテクノロジーにより可能となった緊密で個人的な対話通訳から切り離された、同時通訳の始まりに遡ると従来より指摘されてきた。日本での長きにわたる鎖国時代には、常勤公務員である通詞(つうじ)が、出島に隔離されたオランダ人とのコミュニケーションの手助けという専門職に携わった。通詞がこなした対話的通訳の一環として、おそらく、相互行為の管理(インタラクション・マネジメント)をうまく適応させる必要があったにも関わらず、その立場は中立とは程遠いものであった。Wadensjöの画期的な著書である「*Interpreting as Interaction*」(1998)の出版以来、ブースの外で通訳を行う場合、相互行為のダイナミクスを管理する通訳者の積極的な役割について典拠が示された文献が多数発表され、今日、その積極的な役割が中立的な通訳者という考えに相反すると議論されてきた。コミュニティ通訳の領域で見うけられる力関係のアンバランスという場面では、通訳者は擁護者である、もしくは、擁護者となるべきである、という主張すらあり、中立性の現実性について研究者および実務者の間で自己省察の原因となっている。Wadensjöの著作が発表されてから四半世紀がたった今、対話的談話における相互行為ダイナミクスの管理ができる重要性が認識されているにもかかわらず、通訳者養成、通訳学、および通訳者の評価試験などにおいては、未だに言葉や情報伝達に焦点をあてている。ブースによって物理的な保護が保たれていない通訳者に対する倫理の保護的機能、そしてその中で不可欠な中立性の原理も指摘されておらず、現実的な実践を踏まえた指導もあまり行われていない。このセッションは英語・日本語の両方で行うワークショップ形式で行われ、時間が許す限り対話通訳における相互行為管理の機能を模索し、それがどのように現れ、違う言語への伝達なしでどのように指導できるのか、検討する。また、擁護者にならないよう、対話者同士のコミュニケーションの中立的な「媒体」の存在を維持しようとする通訳者が利用する相互行為管理の様々な戦略の有効性をロールプレイや観察を通じて議論する。

第2日(9月8日) ポスター発表会場(K401) 11:50-13:00

P-1

指点字通訳および指点字通訳者研究へ向けて  
奥野 智萌(東京藝術大学D)

指点字とは、目と耳両方に障害を持つ盲ろう者のコミュニケーション方法の一つで、福島令子とその息子であり、当時盲ろう者になったばかりの福島智(以下福島)が1981年に考案したものである。盲ろう者の人差し指から薬指の両手の6指を点字タイプライターのキーに見立てて、直接点字を指で指に打つ接触によるコミュニケーション方法だ。筆者は、2019年12月末に指点字の手解きを受け、2020年2月から指点字通訳者としての仕事を開始した。

指点字は、接触による1対1のコミュニケーション方法であるため、側から見て何が行われているかわかりづらく、外界から閉じやすいという一面がある。そこで筆者は福島とのやりとりを通して、指点字を空中に飛ばす方法、換言すると健常者へ指点字を「通訳」する方法の検討を行った。このような経緯から制作された《Finger Braille Piano》(2021)は指点字を色のついた光と音によって可視化・可聴化するトイピアノ型装置であり、東京都美術館など3会場で展示を行った。

指点字通訳では言語間の変換はなされず、発話された言葉や周辺状況をテキスト化し指の打点へ変換する。そのため、言語間の変換を行う通訳よりも、シャドーイングの方が行為内容としては近い。ところが、福島は指点字と指点字通訳について、指点字の誕生は1981年の3月、指点字通訳の誕生は1981年の7月と分けて記述している(福島, 2011, p. 168, pp. 247-248)。ここで示されることは、盲ろう者に指点字で話しかけることと、盲ろう者に指点字通訳を行うことは異なる性格を持つということである。

このような指点字通訳について、当事者である福島の著作の他には、通訳を受けた盲ろう者によるコミュニケーションデザイン方法や、指点字通訳者の指点字タイプ圧力変化についての研究は行われてきたが、指点字通訳者の働きについては指点字通訳者によるマルチモーダルな情報伝達過程の研究が一部でなされている程度に留まっている。本発表では、筆者によるこれまでの試みの紹介に加え、今後、指点字通訳および指点字通訳者研究を進めるにあたって考えられる観点を報告する。具体的には、①手話通訳との同異点、②聴覚障害者向けの字幕と視覚障害者向けの音声解説、③スポーツ実況中継、④物語論といった観点である。

【参考文献】

福島智(2011)『盲ろう者として生きて—指点字によるコミュニケーションの復活と再生』明石書店:p. 168, pp. 247-248.